

---

# せいさんかけい！

石田梅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せいさんかけい！

### 【Nコード】

N9958Y

### 【作者名】

石田梅

### 【あらすじ】

一直線上にない3つの点のそれぞれを結ぶ線分によってできあがる図形、三角形。

眼鏡の似合う知的な生徒会副会長・真と、どこかミステリアスで儚げな少女・雪緒、そして「眼力殺傷率120%」凶悪な風貌の誠一。『城山学園高等部・謎の3人組』の描く三角形は、くだらなくも輝かしい日常生活。

恋愛してるんだか青春してるんだか、はたまた何やってんだかわからない彼らの毎日を見守るお話です。

まるで少女漫画のヒロインのように、まっすぐに天真爛漫なお邪魔虫が登場します。

## 第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組

一直線上にない3つの点のそれぞれを結ぶ線分によってできあがる図形、三角形。

その中でも、各辺の長さが相等しく内角が60度であるものは正三角形、または等辺三角形と呼ばれている。  
彼らはまさにその正三角形の体現者だ。

これは彼らのくだらない、だが本人たちにとっては至極大切で輝かしい日常。

冬の気配が近づいている。日が落ちる速度は日に日に増し、風にさらされるむき出しの首筋から寒気が走る。そろそろコートやマフラーの準備が必要だ。

その巡査は、いつも通り夜の町をパトロールしていた。  
ぼつりぼつりと灯る街灯だけが頼りの道を、ゆっくりと自転車をこいで進んでいく。

田舎らしくシャッター街と化してしまっている商店街は、夜になると一層うす暗く人氣がなくなる。こういう場所にこそ非行の芽は出てくるのだ。

とはいえ、ここ最近はやや平和なもの。近隣高校は大人しい生徒ばかりなようで、聞いた問題といえば喫煙・飲酒くらいのものだ。当然禁止されるべき行為ではあるが、その程度でいきがっているようなら大きな問題を起こすこともないだろう。

今日という日もおだやかに終わるはずだ。

毎日同じ時間、同じように巡回していれば、どこをどう確認するかも習慣化してくる。巡査はいつものようにフイッとメインストリート脇の路地をのぞいた。そして彼はハッと目を見開いた。ゆるみきっていた神経が一気に張りつめられる。

華奢な体を押さえつける大柄な男のシルエット。その足元には頭を抱えてうずくまっている少年の姿も見える。

「き、君たち！　そこで何してる！」

巡査は前のめりになりつつ自転車をつまませた。とんでもない平和どころじゃない！　市民の平和は俺が守る！

そんな使命感にかられ、巡査は自転車を飛び降りると痛烈なライトの光を浴びせた。逃げる様子もない、3人はこちらを見て固まっている。それほど驚いたのだろう。

大柄な男は思った通りの目つきの鋭い悪人の風貌だった。襟元を掴まれていたのは少女で、大きな瞳が光っている。おそらく涙がライトに反射しているのだろう。かわいそうに、今すぐ助けるからな！　頭を抑えたまま顔をあげた少年の顔は眼鏡がずり落ちているものの利発そうだ。それを見て彼は一瞬で全てを理解した。

少女に下心を抱き、からむ男。それを止めようとした通りすがりの好青年だったが、暴力に訴えられてなすすべもなく倒れてしまう。あわや絶体絶命、少女の運命は……！　というところに、正義の味方が現れた！　俺だ！！

「今すぐ彼女を離しておとなしくしろ！」

すっかり自分に酔いしれた巡査が言い放ったとき、3人は予想外の反応を示してみせた。巡査を見て一斉に「しまった」という顔をしたので。

「あ　……またか」

男は少女の襟首を持ったまま、小さくため息をついた。そこに反省の色はない。だが、少女はおびえもせず目の前の男にむかって

文句を言った。

「もう、誠一さんのせいですからね」

「だからオレは言ったんだ、この場所はよくないって」

すつくと立ち上がった少年は、意外に上背もありしっかりとした身体つきをしていた。頭を押さえてうずくまっていたとは思えないほど元気そうだ。少年は眼鏡をかけなおしながら警官に向き直ると、2人を促して頭を下げた。

「すみません、御迷惑をおかけしました」

「わたしたちすぐ帰ります」

「……すみません」

ぺこり、と並ぶ姿は一種異様だ。

「え、なに？ なんなの？」

巡査は思わず1人1人に指をさしながら困惑して尋ねた。

「ねえ、君たちモメてたんじゃないの？」

「ええ、ですから俺たちは知り合いで」

「じゃれあってただけでして」

少年と少女が肩をすくめながら説明した。男にいたってはふてくされたようにそっぽを向いてしまっている。落ち着いて見てみると、彼は大人の男というにはまだ幼い。体格が良いだけで年は他の2人と変わらないのだろう。だが、その話はあまりに疑わしい。

「え、えー。嘘だア。脅されてるだけじゃないの」

ちよつと信じられない、と言う巡査に、彼らは態度で証明してみせることにした。

少年が軽く男の肩に手を回したかと思うと、少女はぺとりと男の腹に抱きついてみせたのだ。それどころか左右から男の頬をつっついていいる。男の眉間のシワは深くなるばかりだが、抵抗するつもりもないようだ。

「……幼馴染なんで」

男……というよりもう一人の少年は、不機嫌そうにダメ押しの一言を言った。

次の日の昼休み、城山学園高等部の生徒指導室にて3人を前にした生徒指導教官・篠田は、うんざりといったため息を吐いた。

「またお前ら3人か。何度やったら気が済むんだ？」

「すみませんでした！」

眼鏡がずれるのもかまわず、勢いよく上体を45度に折つたのは2年の宮田真。すらりとした体つきに

知的で繊細な容貌から女生徒の人気は高く、成績も優秀で生徒会副会長を務めている。

「宮田、お前は生徒会にはいつているんだからしつかりしてもらわないと困るぞ。それと有辺、お前もどうしてあんな時間にあんな場所にいたんだ」

「すみません。毛糸を買いに行っていたんです。8時以降も開いているお店は、商店街のほうにしかなかったもので」

有辺雪緒は細く小さな声で遠慮がちに答えた。伏し目がちの憂いをたたえた瞳がミステリアスと評判の、儚さをたたえた1年生である。

「毛糸？ なんだってそんなモン……」

そこまで言ったところで、篠田は上から降ってくる威圧感に気付いた。困ったちゃん3人組の最後の1人だ。

ガタイの良さだけが取り柄の体育教師・篠田と並ぶ体格。身長では完全に篠田は負けていた。口角の下がった口元、眉間に浮かんだシワ、とがった鼻先。この世の全てが気に入らない、とばかりの表情だ。白目部分の多い三白眼を向けられると、タールのようなぬぐい切れない重みが降ってくるような心地がする。入学式当日に上級生から「生意気だ」と喧嘩を売られた際、高価買取して校門を真っ赤に染め上げたことは今や伝説の一つとなっている。「眼力殺傷率120%」と名高い坂上誠一、2年生。

篠田は思わず喉をならし、黙り込んでしまった。

そこへすかさず助け舟を出したのが真だ。

「先生、この度は申し訳ありませんでした！ もう二度とご迷惑はおかけしません」

「あ、ああ！ そうだな、うん！ わかったならいい、もう紛らわしい場所じゃれあうなよ！ も、戻ってよろしい！」

ビシイッと音がするくらいの動きで頭を下げる真に、篠田は慌てて言った。一刻もはやく誠一の視線から逃れたいとばかりだ。

「……すみませんでした」

地の底から湧きあがったような調子の誠一の謝罪は、もう篠田の耳に届いていない。

「失礼しました！」

学生の鑑のようなお辞儀をする真を横目で見ながら、雪緒は口元に小さな笑みを浮かべて言った。

「もう二度と、か。品行方正・成績優秀、信頼厚い副会長サマにとつては何度だって使える手ですね。さすが真さん」

「ん？ 何を言ってる。こんな迷惑、そう何度もかけられないだろう」

まじめな顔をして首をかしげる真に、雪緒は肩をすくめた。

「何をいまさら。この手、今まで何度つかったことか……」

「やめとけ雪緒。このバカに皮肉は通じねーぞ」

「それもそうでした」

素直にうなずいた雪緒は、先に歩きだした誠一の後を追って廊下を歩きだした。

「おい、どういう意味だ。ちゃんと説明しろ、雪緒、誠一！」

3人連れだつて歩くだけで、周囲は一気に大きくざわめく。

すれ違う生徒は壁にはりつき、遠くの生徒は指をさしてくる。

だがそんなこと、もう慣れっこだ。3人は生まれてからずっとこういう扱いを受けてきた。



真と雪緒の組み合わせではお似合いのカップルに見えるが、常とその2人にはさまれている誠一の実在は明らかに異質なものであった。幼稚園から今までにいたるまで、何度「誠一に脅されているのではないか」と尋ねられたかわからない。

そんな違和感の塊である3人組は、家3軒並んだお隣さん同士の幼馴染だ。それも生まれてこの方3人でいないことのほうが少ない、というくらいの中である。

それでも王子様とお姫様と魔王がおてつないで仲良くしている図は、どうも世間一般に受け入れられないらしい。

人々は疑問に思う。なぜあの坂上誠一と一緒にいられるのか。坂上誠一はあの2人といえるのか。どう見たって合いそうにない、というか合うワケがない！　しかし。

真に何を言おうにも、眼鏡を光らせ「俺はアイツらがいないとダメだからな！」としか返さない。

雪緒に何を尋ねても、つかみどころのない笑みを浮かべながら「私はたぶん、あの人たちと離れられないと思うんです」としか答えない。

誠一にはそもそも声をかける勇気がでない。

そこで出た結論が触らぬ神にんとやら、「黙って見守るという名の放置」だ。

『城山学園謎の3人組』というそのまんまの異名までいただいてしまったが、そのおかげか今年雪緒が加わり3人組が再び結成されて迎えた初冬、ようやく落ち着いた毎日を過ごすことができていた。

周囲の人々はこの不可思議なトリオに興味を抱きつつも、誠一という大きな障害に阻まれて近寄ることができなかった。だがしかし、あともう少しだけ近寄ってみようと思っていれば、行動してみたら、すぐに気付いたことだろう。

真と雪緒はどうしたって誠一から離れないし、離れられない、ということに。

3人は削られた昼休みでさっさと昼食をとるべく、いつものように4階の階段通路に移動した。ここはいつでも陽があたってポカポカするうえに、人がめったに來ないのだ。

「しかし、昨日は参ったな」

真は焼そばパンを片手にホットコーヒーをすすりながらしみじみと言った。眼鏡の曇りは気にならないようだ。

「まっただよ、誠一さん」

それに続くのは野菜ジュースを飲む雪緒だ。2人の非難の視線は誠一に向けられていた。

重箱並のサイズの弁当箱を並べていた誠一は、ジロリと雪緒を見据える。

「俺のせいだよ」

「だって、誠一さんが真さんの頭叩いて私の胸倉つかむから勘違いされたんじゃない」

「んだとお？」

雪緒の小さな頭を驚塚むと、誠一は眉間にシワをよせ口元をゆがませた凶悪な顔つきになって言った。

「おめーらがワガママ言うのが悪いんだろが！ 雪緒はいきなり手袋にボンボンつけるって言うし、真は出来上がったばかりのマフラーに穴開けやがって！ だからあんな時間に毛糸買いに行ったんだろが！」

「だって去年誠一さんが作ってくれたマフラーにはボンボンついてた。アレかわいかったんだもん」

頭をがしとかき回されながら主張する雪緒。さらさらのショートヘアが乱れに乱れてしまっている。

「しかたないだろ、気づいたらカバンの金具にひっかかってたんだ。それより俺はお前の顔が問題だと思うぞ。目つきとか」

そう言いつつ誠一の弁当に手を伸ばす真に、誠一の眉間のシワは深まるばかりだ。当然、その手が届くまえにたたき落とす。すると

それを見た雪緒は、今度は誠一の援護にまわった。

「ひどい、真さん。誠一さんはちよつと眉間のシワが深くて目元が鋭いだけ」

「……雪緒、お前そんなモンで野菜とつた気になってんじゃねーぞ。オラ、食え」

そう言つて差し出された彩り豊か、栄養満点の弁当箱に雪緒は素直に飛びついた。

「わーい！ サトイモの味噌煮食べたーい」

「何！？ ずるいぞ雪緒！ 誠一、俺にも弁当わけろ！」

「てめえはその炭水化物のコラボで十分だ！」

「ウグイス豆おいしい」

「雪緒、添え物ばかり食つてないで、ちゃんと飯を食え。おにぎりちゃんと中身コンブにしてやったから」

「誠一、お前雪緒にばかり甘すぎじゃないか？ 俺の卵焼きはどうした」

「うるせえ、知るか！ そこにあんだろ！」

怒鳴りながらおにぎりを手渡し、卵焼きを突きだし、誠一はいつもながら忙しい。そのうちに誠一の肩に雪緒が寄りかかってきた。

「お腹いっぱい。眠くなってきた」

「寝てんじゃねーぞ、雪緒。食うだけ食つていつもボーっとしやがつて……」

雪緒はミステリアスではない。ただのボンヤリ少女だ。

「あ、真さんのボタン飛んでった」

「ん？」

「ん？ じゃねえよ！ 無理やり引つ張つたらボタンもとれるわ、何やつてんだバカ野郎！」

「いや、袖をめくろうと思つてな」

「なんでボタンをはずすつて発想がねーんだよ、お前の脳ミソは！」

成績優秀・品行方正な生徒の鑑である真は、勉強はできても常識的なことに多少問題がある。

「ったく、お前らは……。真、ボタン取ってこい！」

誠一は眉間のシワをより深くしながらソーイングセットを取りだした。恐喝・強盗・殺人などと思いつく犯罪は一通りこなしていそうな顔をした、お母さん級の世話焼き苦勞性。誠一はベツタリとまとわりつく幼馴染たちを長年面倒みてきたのである。

甘やかされた真と雪緒が今更誠一から離れるはずはない。

そして誠一も、目を離れたすきに何をやらすかわからない2人が心配でたまらず、離れることができないでいる。

本当のことを知っているのは彼ら自身とそれぞれの両親くらいのものだ。

これは、そんな3人組を見守るお話である。

## 第1話 自己紹介を兼ねまして ある日の3人組（後書き）

まずは3人の紹介を兼ねたお話から。

これから彼らの描く奇妙な正三角形を、ともに見守っていただけると嬉しいです。

ご意見・感想をお待ちしています。

一言でもいただけると、本当に胸がいっぱいになるんですよ。  
よろしく願います。

## 第2話 ある朝の3人組

冬の空は薄い青だ。

天気はいいが、まだ空気があたたまっていない。朝の7時を過ぎ、閑静な住宅街はようやく動き出そうとしていた。

せまい土地を最大限に利用しようと考えられた造りの家は、三つ子のように三軒ちょこんと並んでいた。そのうちの二軒から出てきた真は、ぴんぽーん、と隣の家チャイムを鳴らし、返事が聞こえる前にさらに隣の家の前に移動した。またチャイムを鳴らす。

これが真の朝の日課だ。

「おはよう、誠一！」

「……おう」

のっそりと出てきたのは誠一だ。眠りの浅い誠一にとって、朝日は天敵だ。目元の筋肉がひきつり、凶悪な顔がより凄みを増していた。

「相変わらずのひどい顔だな！」

「うるせえよ、お前は相変わらずムカつくほどイイ笑顔だな」

「当たり前だ、早寝早起きは基本だからな」

嫌味も通じず胸をはる真に、誠一は重い頭が余計に重くなるのを感じた。思わずうなだれたとき、誠一のわき腹に何かがトスンとぶつかった。

「お、はようございます……」

眠りは深いが何時間でも眠っていたい雪緒だ。なんとか玄関を出てきたのはいいが、誠一にぶつかったまま寝息を立て始めた。その目は完全に閉じられている。

「おはよう。起きろ、雪緒。朝食は食べたか」

真の問いかけにも答えない。

雪緒の首根っこをつかんで立たせながら、誠一は髪の毛を整えてやった。やわらかく癖のない雪緒の髪は、手櫛ですいてやるだけで素直にまとまる。

「ん……………」

雪緒が右手に持っていたゼリー飲料を真に見せると、のろのろとした動きでそれを自分の口にあてがった。

「いい加減ブドウ味飽きた……………」

「ゼリーではなく米を食べればいいだろう」

まさに正論であるが、真の言葉に雪緒は首を横に振る。

「食べる時間があるなら寝ていたい……………」

雪緒のいぎたなさは筋がね入りだ。雪緒の部屋には目覚まし時計3個が常備されているが、雪緒を完全に目覚めさせることはできずにいる。

「まったく、しかたないヤツだな」

真は苦笑を洩らすと、雪緒の左腕をとった。誠一はもの言いたげな視線を真に向けるが、何も言わずに雪緒の右腕を同じようにつかむ。そしてそのまま雪緒をずるとひきずって道を歩き出した。

小柄な雪緒が背の高い2人に連れて行かれる様は、まさに「宇宙人捕獲絵図」である。

だが、近所の奥様方や犬の散歩をしているご老人方から不審な目で見られることはない。

これも毎朝の風景の一部となっていたからだ。

「相変わらず起きないな、雪緒」

真は感心したように言った。そして眼鏡を光らせながら少しだけ上にある誠一の顔を見た。それに気付き、誠一は口元をひくつかせる。

「誠一、俺は思ったんだが」

「言つな。聞きたくない」

「朝、俺がコイツをランニングに誘うのはどうだろう」  
「やめろ」

真の提案を、誠一は間髪いれずたたき落とした。

「なんでだ！ 健康にもいいし、雪緒は朝食をしっかりと食べられる。いいじゃないか」

「……お前、朝何時に起きて何キロ走ってる？」

「4時に起きて15キロ走っている」

「付き合えるか！」

勉強もできるスポーツも得意な真は、校内では文武両道を地で行っているように評価されている。しかし真実は、己を鍛えるということに妄執ともいえる情熱をそいでいる体力バカだ。

「そうか？ 雪緒も案外体力があるから、少しずつ慣らせば……」

「慣れる前に倒れるぞ」

「それは困るな」

真はしぶしぶと言った様子で引き下がった。だが、またすぐに立ち直る。

「なら、こういうのはどうだろう」

「お前のアイディアは何一つ聞きたくねえんだよ！」

「雪緒は正攻法では起きないことは証明済みだ。なら、起こすことではなく運搬法を考えよう」

真の耳は器用に誠一の訴えをスルーする。真は雪緒の腰をがっしりとつかむと、犬猫を扱うかの如くひょいと持ち上げ、肩に担いだ。

「こうやって運ぶというのは」

「ぶっ……」

雪緒の顔面が勢いよく真の背中にぶつかる。

「ん？」

「鼻つぶれんだろ！ せめて抱っこか背負うかにしろ！ っていうか運搬って言うな！」

誠一はあわてて考えなしの幼馴染から雪緒を取り返す。



「甘やかしすぎるのはどうかと思うが」

「てめえのは虐待なんだよ！」

悲しいことであるが、やはりコイツは頭のネジが何本かぶっ飛んでいる。誠一はそう思わずにはいられない。

「ん、ん」

「お、効果があったじゃないか。雪緒が起きたぞ、誠一」

「さっきのは運搬手段つってただろうがっ。おい雪緒、平気か」

さすがの騒ぎに雪緒はむずがって声を上げた。誠一は真に変わり、雪緒をあやすようにゆすりながら胸に抱いてやる。

小さな鼻先が少しだけ赤くなっているような気がするの、やはり顔面に受けた衝撃のせいだ。こんなんでも一応女の子、と誠一が青くなっていると、雪緒はまづげを震わせてまぶたを開けた。

「……うるさくて眠れないんですけど……」

「……………」

誠一は無言で雪緒を下ろすと、右手で雪緒の首根っこをひつつかみ、左手で真の頭蓋を握りしめながら歩き出した。

「あ、ちょ、誠一さん？ 私起きました、起きましたよー」

「ぐああああ、待て、誠一！ これは痛い、かなり痛いぞ！」

「もついい。お前らに付き合ってたらいつまで経っても学校につかねー。このまま行く」

誠一は宣言通り、城山学園高等部の校門をくぐるまで2人から手を離さなかった。真と雪緒の悲鳴がBGMだ。

毎朝こんなことをやっているから『謎の3人組』扱いされていることに、本人たちは気づいているのかいないのか。

## 第2話 ある朝の3人組（後書き）

第2話を読んでいただき、ありがとうございます！

3人組はいかがでしょうか？

淡々と過ごしながら変化を迎える彼らを、どうか見守ってやってください。

ご意見・感想をお待ちしています！

### 第3話 ある午後の3人組

伏せたまつげが物憂げな影をつくり、青白いともいえる肌とあいまって無機質な印象を与えている。熱の感じられない表情が、それを余計に増長させていた。

だがぼてりと赤い唇が、彼女が人形でない証となつて奇妙な色香をかもしだしていた。一部の乱れもなく城山学園高等部の女子制服に身を包んだその立ち姿は、愛しい者に手折られるのを待つ可憐で儂い一輪のスイセンのようである。触れると消える儂い幻のような、それでも手をのばさずにはいられないような、淡い存在。

雪緒がかわいらしいのは周知の事実だ。真も誠一も、とつくの昔から知っている。

だが、淡い幻どころか濃すぎる実態を持っていることも2人はよく知っていた。

「しまったな、こんなに混むとは思わなかった」

真は両手に持ったドリンクカップをしっかりと持ち直した。右は自分のホットコーヒー、左は雪緒の紅茶。どちらも人にぶつかってこぼしたら大惨事になる。

「平日だつてのに、ヒマなもんだ」

「俺らも似たようなもんだろうが」

自分用のコーヒーとバケツサイズのポップコーンカップを持った誠一は、宇宙船の内部のような光の飛び交う薄暗い映画館のロビーを見渡した。

チケット売り場と売店前は長い行列ができている。そこからようやく抜け出した2人は、ほっと一息ついたところであった。

定例職員会議のため午前中だけで授業が終わった城山学園高等部の学生たちは、一斉に街へ飛び出した。

普段は何もせずだらだらと過ごすことが多い3人であるが、出無精代表のような雪緒が珍しく「見たい映画がある」と言い出したのだ。それならば、と電車で数駅離れた街へ繰り出してみれば、平日の昼間にも関わらず映画館は人でにぎわっていた。

飲み物を買に行っただけなのに、思いのほか時間をとられてしまった。

「雪緒、じれて動き回って迷子になっていないだろうか」

「不吉なこと言ってるじゃねーよ」

雪緒は女子の平均身長からみても小柄だ。人並み以上に体格の良い誠一からすれば、つぶれても仕方のないサイズに見える。何も考えていない真の発言とはわかっていながら、誠一は心配になってきた。

「おとなしくしてるとは言っておいてが……」

迷子を心配する母親の如く、誠一は雪緒を探す。そして言いつけ通り、映画予告が流れる大型テレビ画面の横に立つ雪緒の姿を見つけてホッと胸をなでおろした。

だが、誠一はその隣にいる余計なものまで見てしまった。

見知らぬ若い男が雪緒の手をつかんでいるのだ。そしてそれをからかうように見ている男が3人。

雪緒はいつもと変わらぬ冷めた顔で、目元一つ、口元一つ動かさない。これでは本気で嫌がっているとは伝わりにくいだろう。だが、内心かなり苛立っていることが誠一にはよくわかる。ふりほどこうと細い腕を左右に振っているが、男はにやけた笑みを浮かべながらなおも雪緒に話しかけていた。男同士で来ていたところ、1人たらずむ雪緒に目をつけたのだろう。

通り過ぎる人々が多いが、誰も助けようとはしない。

「あの野郎……」

誠一は静かに怒りを吐き出した。

「雪緒！」

真もようやく事態に気づいたらしく、眼鏡の奥の瞳を陰しくさせる。

それを確認した誠一は、真に「行くぞ」とアイコンタクトを取るうとした。両手の荷物を放り投げ、ダッシュついでに飛び蹴りでも食らわせりやあの命知らずも退散するだろう。誠一は手に持っているのが熱々のコーヒーとぶちまけると大変面倒なポップコーンであることも忘れた。

だが、しかし。真は誠一の視線に気づきながらもそれを無視した。そしてあるうことが、

「外側に立って手を引け！」

と叫んだのだ。

こいつ何言つてやがる、本気で頭おかしくなったか？ と誠一が思ったその瞬間だ。

雪緒は八つと顔をこちらに向けると、すぐさま行動に移した。流れるように鮮やかな動きだった。相手の左手によって右手首をつかまれていた雪緒は、男の体の外に向かって一歩踏み出し体を反転させた。その体制をとることで男は手首を返される形になり、力が入らなくなるのだ。そして雪緒はするりと手を引き抜くと、そのまま男のわき腹に裏拳を叩きつける。ぐえつと顔をひきつらせて体を半分に折ったところを、雪緒は手のひらで押し上げるように相手の顎を下から突いた。

男がひっくりかえる瞬間が、まるでスローモーションのように見える。

雪緒は哀れな敗者を冷え冷えとした目で見下ろした。

「よおつし、よくやったぞ——！」

「何やってんだお前はアあああ——！！！」

カップを持ったままガッツポーズをつくる真をしり目に、誠一はポップコーンをまきちらしながら突進した。小さな飲み口からコーヒーがこぼれ手を濡らす、熱さなど感じていられない。その勢いに、他の客たちは一斉に飛びのいて誠一の道を作る。

「おいコラ雪緒！ お前今何やった！！」

「あ、誠一さん。お帰りなさい」

「おう、待たせて悪かった……じゃねえっつの！」

誠一が作った人波の切れ目を悠々と歩いてきた真は、誠一の怒鳴り声を無視して晴れやかな笑みを浮かべた。

「雪緒、さっきの良かったぞ！ 練習した甲斐があったな」

「あんなのどこで使うのかと思ったら、案外役に立ったね」

ぐつと親指を立て会う2人を、誠一は苦々しい思いで睨みつける。

「てめーだな、真！？ 雪緒に妙なことを教えたのは！」

「妙なことじゃない、ちよつとした護身術だ」

真は何を言ってるんだお前は、という目で誠一を見た。

話にならん、こいつは何にもわかつちやいない！ 先ほど自分は飛び蹴りをしようとしたことなどすっかり棚にあげ、誠一は幼馴染2人の奇行に首を横に振った。

「あ、あんたらなア、その女の子とどういう関係かしらないが、いったいなんなんだ！？ 非常識にもほどが……！」

ようやくショックから回復したのか、わき腹を抑えながら男は顔を上げながら抗議してくる。固まっていた仲間の3人も彼に続いて向かってこようとしたが、その威勢の良さも長くは続かない。

それもそのはずだ。言いようもない怒りにかられ、薄暗い照明の下でにぶく光る誠一の目に射抜かれたのだから。

「………お、お連れさまにたいへん失礼しました……」

「………わかりやいいんだよ」

それだけ言ってさっさと退散した男たちを背中を送り、誠一は少しだけ力サの減ったポップコーンを雪緒に渡す。

「雪緒、いつあんなの習ったんだよ」

「この前俺が教えた。いざというとき身を守ることくらいできたほうがいい」

真が満足げに鼻をならした。最近真の部屋によく雪緒が出入りすると思ったら、案の定ろくでもないことをしていたらしい。誠一は自分の監視が甘かったことを若干後悔した。

だが、と誠一は自分の腹あたりにある雪緒を見下ろした。

さっそくポップコーンをほおばる今の雪緒は普段よりずいぶんと幼く、危なげに見える。普段は近寄りがたい雰囲気をしているくせに、妙な連中を引き付けやすい少女であることは事実だ。真の言うとおり、身を守る術を心得ている分にはかまわない。だが、誠一の予想斜め上を走ってくれるのがこの幼馴染だ。

「だからってフィニッシュまではいらねーだろ、真才ー!!」

「雪緒、手は痛くないか？」

「平気」

「聞け!」

お前らしい加減に怒るぞ、と誠一が怒鳴りつけようとしたとき、2人は示し合わせたかのようにそろって口に指をあて「しーっ!」と言った。そしてわざとらしく周囲を見回す。

「うるさくしちゃうと迷惑になるよ、誠一さん」

「そろそろ時間だ。3番シアターだったな、行くぞ誠一」

「お前らなア……」

この騒ぎで今更「静かにしろ」も何もない。この場の視線は全て3人に注がれている。にぎやかだった空間にぽっかりとした穴があき、今ではこちらを指さしながらのひそひそ声ばかりが聞こえてくる。

「はい、誠一さん」

ギリギリと歯ぎしりをする誠一の口元に、雪緒は細い指先をあてがった。ポップコーンがつままれている。

「……」

それを無言で口で受け取ると、雪緒は口角をほんの少し上げるだけの笑みを浮かべて見せた。それは雪緒にとっては満面の笑みに等しい。表情筋のあまり発達していないと思われる小さな顔であるが、内面の喜怒哀楽は激しい。

雪緒はこれから見る映画にはしゃいでいる。真もそれをわかって  
いる。

誠一はキャラメルのフレーバーがついたポップコーンを苛立ちとともに飲み込み、雪緒の背中を押しつつ真の後に続いたのだった。



### 第3話 ある午後の3人組（後書き）

だらだらと変わり映えのない日々をおくる3人ですが、次回から少しずつ変化が訪れます。  
どうぞお付き合いください。

ご意見・感想をお待ちしています！

#### 第4話 生徒会室での3人組

「大変だね！　こんな仕事、放課後にやらなくちゃいけないなんて……」

やわらかい響きの女の子の声。少し震えているのがかわいらしい。しかし、それに答える男の声はなんとも無愛想である。

「たいした作業ではない。それぞれの書類に署名して生徒会印を押すだけだからな」

「あの……手伝おうか？」

「この仕事は生徒会の人間しかやってはいけないことになっている。君は違うだろう」

「そっか、ごめん……。でも、書類を分けたりとか渡すとかできるし！　効率あがるよ？」

「今やっているのが俺が一番やりやすい方法だから、余計なことはしなくていい」

「そ、そっか……。ごめんなさい」

女の子はしゅんとしおれたように黙り込み、猛烈なスピードで紙の束をめくる音だけが聞こえてきた。

「真さんってバカですね」

「真はバカだな」

雪緒と誠一は、給湯室の扉のそばにうずくまって耳をコップに押し当てていた。そんなことをしなくても十分に隣の会話は聞こえるのだが、これは気分を出すための小道具だ。扉をはさんだ隣の部屋は生徒会室であるが、今そこは生徒会副会長である真と、彼と同学

年らしい女生徒の2人きり。

人気のない生徒会室は、対真用の定番の告白スポットである。常識こそないが根は真面目な真は、誰もやりたがらない事務作業を一手に引き受け、時折こうして1人で居残っている。そのときこそ、真に想いを伝える絶好の機会なのだそうだ。

「真さん、顔は綺麗だから」

「成績はトップクラス、運動神経も抜群だしな」

こそこそと耳打ちしあいながら、2人はやれやれと肩をすくめた。

生徒会室には隣接して給湯室があり、そこにはちよつとしたお茶菓子と飲み物が常備されている。3人組の数少ない理解者の1人である城山学園の女傑・生徒会長の二本松清香は、真の仕事に対する報酬として空いている時間に限り生徒会室を開放してくれていた。

今日も真をからかいつつも2人でティータイムを楽しもうとしていたのだが、予期せぬお客様が訪れたというわけだ。「宮田くん、ちよつといいかな？」という控えめなノックを合図に給湯室に隠れることにはもう慣れた。

今まで幾度となく同じシチュエーションで、取り付く島もない真に撃沈していった女生徒達を目に（正確には耳だが）してきた。これでまた真なんかに泣かされる女性が増えるのか、と雪緒は嘆かずにはいられない。

しかし座って紅茶を飲みたいのではやく諦めてくれないか、とも思ってしまうのが正直なところである。

「あの野郎がとんでもないバカだってことにどうして気付かねーんだか」

「パツと見ただけじゃ伝わらないんだね」

真は鼻筋の通った優しい顔立ちをしている。線が細い割に筋肉質な体格はボクサーのそれにも似て、腹が割れているというのが本人の自慢である。勉強も毎日の予習復習は学生として当然のこと、と真顔で言っただけのける。

見た目はまさに眼鏡をかけた王子様だ。

だが中身は王子には程遠く、真面目も行き過ぎれば短所にしかないことを証明してしまっている悲しい男だ。

彼女たちが何のためにわざわざ用もない生徒会室に訪れているのかいい加減わかってほしいが、真にはまったく通じていない。だから「俺たちがいることは絶対に言うな」と毎回言い含めなくてはいけなかった。これだけ鈍感な男、どこがいいのだろうか。

誠一と雪緒はため息をつきそうになったが、気を取り直したような女の子の

「じゃあ、お茶でも淹れてあげる！」

という華やいだ声にビクリと体がはねた。

せまい給湯室だ、流しの下に雪緒は隠れても、誠一が入るようなスペースがあるはずはない。窓から飛び降りようにもここは3階だ。

どこへ身を隠そう、とあわてる2人を安心させるかのように、落ち着いた真の声が響いた。

「いや、結構だ。それより申し訳ないが、君の左隣にある棚から青いファイルをとってもらえないか」

「うん、わかった！」

頼まれたことがよほど嬉しかったのか、女の子がパタパタと足取り軽く動く気配が伝わってくる。

真にしてはうまいアドリブだ、と雪緒はほっと息をついた。窓のサンの足をかけていた誠一もこそそこそと戻ってくる。

「あ、これ花山先生の字だね」

「そうだな」

「花山先生って字は汚いけど、生物の授業わかりやすくておもしろいよね」

「ああ、俺もそう思う。この前の人体については特に……」

急に話がはずんだ扉の向こう側に、今度は呆れではなく驚きで2人は顔を見合わせた。

「すごい。真さんが楽しそう」

「まア、アレは筋肉の話題だからかもしれないが……」

話の内容はイマイチだが、チヨイスはまさに真好みだといえる。思わぬ真の好反応に、誠一と雪緒はコップを放りだして直接扉に耳をあてた。

「ふふ、そういえば飯田先生も字は特徴的だよー」

「言ってるな。俺もノートをとるのに苦労する」

「えー、宮田君が！？ でもすつごくキレイで見やすいノートだって評判だよ？」

「そうだろうか」

「うん、今度テスト前に見せてもらおうかな」

しおれかけたところで水を与えられた花は、再び咲きほころんだ。色恋というのは複雑であるが、他人のを見ているとこれほど滑稽なものはない、と誠一は舌打ちしたい気持ちになった。

雪緒は誠一とは違い、立ち直りの早さに素直に感心している。

「ねえ、誠一さん。恋する女の子って強いね」

「ああ。あれだけの会話であそこまではしゃぐんだからな」

とはいえ、実際真に対してこれだけ会話が続いた例はマレである。今までにないことが起きるかもしれない、と野次馬根性が騒ぎだしてきた。

だが、しかし。

「教わっている教師が同じなようだな。君はどここのクラスだ？」

「……あたし、宮田君と同じクラスだけど」

春のようにばわばわと温かかった空気が、一瞬で凍りつく。

「あ、すまない、目に入っていなかったようで……」

「もういい。あたし、帰るね」

冷え切った声音がしたかと思うと、いくらか経たぬうちにビシャン！と大きな音を立てて扉が閉められた。

「なんだっただ、一体。おい、誠一、雪緒。なんだかわからんが彼女はもう帰った。出てきて平気だぞ」

給湯室の扉を開けて2人を呼ぶ真の顔には、罪悪感も後悔も反省も、なにもない。

「……………」

「……………」

誠一と雪緒は、今度こそ大きなため息をついた。

「やっぱり真さんって」

「バカだな……………」

「な、なんだいきなりお前ら！」

**第4話 生徒会室での3人組（後書き）**

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第5話 帰り道の3人組

さむいさむい、と身をすくめながらも、放課後の解放感に生徒たちは浮かれながら校門を出ていく。そんな中、注目を集めながら歩いてくる雪緒と真の姿があった。

雪緒と真は2人で帰宅の途についていた。誠一は用事がある、と足早に先に帰ってしまったのだ。強面の誠一が抜けると2人はまさに美男美女の組み合わせ、いつもとは違った意味で人目を引くのである。

「うつ、寒い……。なんだって女子高生はナマ足という苦行に耐えなければならぬのか」

「なんで耐える必要があるんだ。女子制服の規定ではタイツとかあるだろう」

「そもいかないのが女子高生の悲しいサダメ」

「腹巻はいいのにか」

「ボディウォーマーって言って。おなかは見えないからいいの」

「女子高生というのはわからんな……」

高校生らしからぬ落ち着きをもって真剣な顔をして話しこんでいる2人だが、内容はいつも中身の無いものばかりだ。雪緒は誠一お手製の真っ白なマフラーで口元まで覆い、ふるつと体をふるわせた。

「うつ……」

「できれば俺のズボンをはかせてやりたいが……」

「絶対やめてください」

「当たり前だ。俺も路上で下半身パンツのみになる気はない」

雪緒は大真面目な真をじっとりと睨みつけた。正気を疑う発言だが、真ならば冗談になりかねないから怖いのだ。



「だが、寒いなら我慢するんじゃない。風邪をひくと誠一が怒るぞ」  
そう諭され、雪緒の脳裏に強面の顔をよりすさまじいものにしな  
がら怒る誠一の姿がうかんだ。きつとたまご粥を作るための菜箸を  
片手に「体調管理もできねーのか！」と怒鳴ることだろう。

「気をつけようつと……。あ、ところでなんで今日は誠一さんいな  
いの？」

「誠一なら、呼び出しを受けたようだ」

「ああ……」

雪緒は目を伏せ、手袋（これも誠一お手製である）の毛糸のボン  
ボンをいじった。その仕草を見て、真は雪緒の頭を自分の胸元に引  
きよせた。

驚くべきことではあるが、この地域ではいまだに「高校の×  
×ってヤツが強いらしいぞ」「負けてらんねえ、アイサツしに行っ  
てやろうぜ」という会話が成立している。城山学園は比較のおとな  
しい学校ではあるが、その分誠一の実力は際立ってしまった。  
おかげで時折、他の高校の柄の悪い連中から「呼び出し」を受けて  
しまうのだ。

「大丈夫だ。あいつは負けない」

「それでも、万が一ってことがあるでしょ」

「その万が一のために俺がいるんだ」

「終わってからしか行かないくせに」

「俺が行くのはあいつが負けないようにするためじゃない。あいつ  
の敵討のためだ」

「負けるの待ってるワケ？」

「負けない。だから俺の出番はない」

「意味わかんない」

まったく顔色を変えないが、雪緒がへそを曲げたことをすぐさま  
察知した真は苦笑いを浮かべた。

「雪緒。そうすねるな。誠一がまた困るぞ」

「すねてないよ」

「嘘をつけ。俺にはすぐわかるぞ」

真は深緑色の手袋をした手で雪緒のほほをくすぐった。

「そろそろ終わっただろう。お土産を買って、迎えに行こう」

「……うん」

誠一はポリバケツの上に置いておいたカバンとコートを取り上げた。隣の怪しげな店の通気口から流れる臭いが移ってしまっていないかが気がかりだった。

吐く息は白いものの、暴れたおかげで体は熱い。誠一はうめき声をあげて地面に這いつくばっている少年たちを一瞥し、その場をあとにした。鼻筋を狙って鼻血を出させるだけで、大抵の連中の戦意は喪失する。今回も同じで、ここに倒れている人数よりも逃げて行った人数のほうが多かった。

案外早く終わったな、と誠一は首の骨を鳴らした。怪我はない。悲しいことにケンカダコができた右拳は、多少の衝撃では痛みも感じない。

夜にこそ華やぐ店が並ぶ裏通りのパーキングエリア。狭いうえに両側からのしかかるように生えたビルのおかげで日が当たらない。昼間に通りがかる人間はほとんどいないし、城山学園からも適度に離れている。誠一は「呼び出し」に応える際にはいつも必ずこの場所を指名した。

細い道を大腿で歩き、大通りに一步踏み出したところで誠一は足をとめた。

幼馴染2人が並んで立っていたからだ。しかも、片方は大きな瞳に不満の色をにじませている。

「よう。今回もあっさり終わったみたいだな」

「……おう」

誠一は軽くうなずくが、あっさり終わるのはここまでだな、と心の中で嘆息した。拳で片付く問題のなんと簡単なことか！

「誠一さん」

「なんだよ」

誠一は雪緒と視線を合わせない。

「肉まん。まだ温かいよ」

「……おう」

誠一は瞠目しながら、雪緒が差し出した紙袋を受け取った。開けたとたんに湯気がたちのぼり、なんとも食欲をそそる香りが鼻をくすぐった。

「雪緒。俺にもくれ。食べながら帰ろう」

真が雪緒の背中を押す。そして誠一に向け、どうだと言わんばかりの得意げな笑みを向けてきた。

誠一はけつと口元をゆがめる。

誠一が丁寧に「呼び出し」に応えるのは、校門前で待ち伏せされるのが嫌だからだ。高くもない評判をさらに落とすことになるし、一方的に殴られるのも我慢できない。だったら素直に迎え撃ったほうが楽というものだ。

それに、と誠一は隣で自分の顔ほどもある肉まんをほおばる雪緒を見下ろした。

誠一には、何よりも守らなくてはいけないものがある。うかつに学園近くでからまれて、むぎむぎとソレを危険にさらすことはできなかった。そして自分がその場を離れても、ソレのそばには信頼できる男がついている。だからこそ誠一は安心してあの場所で「呼び出し」を受けるのだ。

いつしか減るだろうと思っていた「呼び出し」の回数が一向に減らないことが誤算であったが、そんなことはもういい。諦めた。

毎回毎回誠一を悩ませるのは、別のことだったのだが。

今回は真がうまくやってくれたようだな。

誠一は内心ほっとしながら肉まんの最後のひとかけらを飲み込ん

だ。

そんな誠一の心を見透かしたようなタイミングで、雪緒はすかさず「誠一さん、なんか脂っぽい変なニオイがするー」

と露骨にそっぽを向いて見せた。ご機嫌は完全にはなおっていないらしい。

「……悪かったな」

雪緒は肉まんから顔を離し、じっと誠一を見つめた。

「あとで全身消臭スプレーかけてあげる」

「そりゃどーも」

真は肉まんの湯気でくもった眼鏡を拭きながら、素直ではない二人の幼馴染を見守っていた。

## 第5話 帰り道の3人組（後書き）

今回は新たな登場人物が加わり、お話が動いていく予定です。

ご意見・感想をおまちしています。

## 第6話 3人組と乱入者

絶妙なバランスを保っていた正三角形。

それをいまさら打ち崩そうとする人間が入り込むとは、雪緒にも真にも誠一にも、思いもつかないことだった。

「季節外れではあるが、ご両親の都合で急きょ転入してきた大橋愛梨さんだ」

「大橋愛梨です、よろしくお願いします！ 仲良くしてください！」

クラス中の注目を受け、彼女は満面の笑みを浮かべてポニーテールを揺らした。

なんだか少女マンガの主人公のようだ、と雪緒は思った。

「空いている席に座りなさい」

「はい！」

大きな目はきらきらと輝き、細い手足はバネ仕掛けのように跳ねながら動く。愛梨は担任教師が指さした席、つまり雪緒の隣へとまっすぐに向かってきた。

「よろしく！ 仲良くしてね」

愛梨は茶目つけたつぶりに言った。堂々としたものだ、と雪緒は感心してしまう。

「よろしく」

雪緒が返事をする、と、愛梨はきょとんと首をかしげた。

「具合悪いの？ 大丈夫？」

「……元気だけど」

いきなり何を言うのか、と雪緒まで首をかしげると、愛梨はにっこりと笑った。

「よかった！ 表情が暗いから病気かと思って心配しちゃった！」

「……そう」

仲良くなれないかも。雪緒は心の中でこっそりつぶやいた。

「ユツキーって呼んでいい？ 雪緒ちゃんもいいけど、もっと砕けたカンジがほしいし。あ、あたしは愛梨でいいよ！」

「ねえ、トイレ一緒に行こうよ！」

「ユツキーまた顔暗くなってるよー、もう！」

愛梨に悪気はない。彼女は心からの好意をもって雪緒と仲良くしようとしていた。転校先で最初に話した相手なら、そうするのは至極当然といえる。雪緒もそれは理解していた。

それでも、なぜ自分は彼女を素直に受け入れる気になれないのか。

「大橋さん、私のことは有辺でいいよ」

「トイレなら教室を出て右に行けば、階段そばにあるよ」

「この顔はもともとだから」

雪緒のあまりに無愛想な返答に、教室中はひやひやしながら、しかし多大なる好奇心をもって2人を見守っていた。

雪緒はもともとこの1 Aでは浮いていた。謎の3人組の1人ということもあるが、整いすぎて温度を感じさせない容貌がそれに拍車をかけていた。クラスメートと交流を持たないわけではないが、雪緒はいつもある程度の距離を置いた付き合いしかしていない。いや、許さないといったほうがいいかもしれない。

今年度の1 Aが成立してからすでに9カ月がたとうとしている。だから多くのクラスメートたちは雪緒との付き合い方も慣れてきたところではあるが、愛梨のようにいきなりズカズカと踏み込んでいった人間はいなかった。さて、雪緒はどうなのか。そして愛梨はどう反応するのか。

愛梨がバツサリと斬られることは予想済みだったが、ギャラリーの期待に応えるように、彼女はきょとんと大きな目をさらに大きく丸くした後でまた笑った。パツと太陽のように明るい笑顔だ。

「ユツキーってクールだね。顔も声もすつごくかわいいのに、中身はかっこいいんだー！　うらやましいな！」

おお、とひそやかにざわめく教室。これには雪緒のほうに驚いた。この子、全然めげない。

「ねえユツキー、お昼いつもどうしてるの？　一緒に食べよー！」

しかし、この愛梨の発言にはさすがに教室が凍りついた。雪緒が真や誠一と昼食を共にしていることは周知の事実だったからだ。転校初日に誠一のような人間と顔を合わせるのは強烈すぎる。

「ごめんね、私、いつも一緒に食べている人たちがいるから」

雪緒はやんわりと言うが、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握って離さない。触れられた箇所から鳥肌が立ちそうだった。

「あたしも入れてもらえないかなー、なんて？」

こてん、と小首をかしげて上目づかいに雪緒を見る愛梨。愛梨は格別美少女とは言えないが、小動物じみた愛きようがあった。口角がきゅっと上がった口元が愛らしい。見るものを引き付け、おねだりを聞いてあげたくなるような魅力だ。

これが庇護欲というものか、と雪緒は冷静に愛梨を観察した。

「ねえ大橋さん、わたしたちと食べようよ」

「うん、有辺さんはこの通り、静かなのが好きな人だからさ」

思わぬところで救いの手。

興味は尽きないが雪緒が困っているとみて、クラスの女子が助け舟を出してくれた。雪緒が感謝の視線を向けると、彼女たちは恥ずかしげに頬を染めて雪緒に笑いかける。

妙なところではのかな友情を感じた雪緒だったが、愛梨は一筋縄でいく相手ではなかった。

「えー？　なにそれ、変だよ！　なんだかそう言って距離置いてるほうがさみしいって」



愛梨は驚いたように目をぱちぱちとまたたかせる。

「いや、校内にはちよつと危ない人とかもいるからさ……」

その危ない人のもとへ行こうとしている雪緒は、誰にもわからない苦笑いをもらす。

「危ない人？ 会ってみないとわかんないよ。大丈夫、大丈夫！」

忠告もむなしく、愛梨は雪緒の手をぎゅっと握り直すと、もう片方の手で弁当を掲げて見せた。

「ね、ユツキー行こ？」

「……………」

雪緒のほんのりとあたたまった心が急速に冷えていく。

4階の階段そばは冬場は寒い。最近は空き教室にもぐりこんで弁当を広げている。

先に来ていた真と誠一は、ぽかんと口を開けて愛梨を見つめた。

「こんにちは、今日転入してきた大橋愛梨です！ お邪魔します」

「そういうコトです」

雪緒はもうどうとでもなれ、と愛梨を真と誠一に任せることにした。

「わアー、センパイ、ですか？」

制服の襟元についた学年を示すバッジを見て、愛梨は尋ねた。臆した様子もなく愛梨は2人に歩み寄る。

真もどうしていいのかわからないようで、雪緒と愛梨を交互に見ては戸惑っていた。誠一に至っては何も言わず、弁当を並べている。一種の現実逃避だ。

今までこの3人の集まりに他人を入れたことはなかった。たいていの人間は誠一に恐れをなして近寄ってこないからだ。

誠一がだんまりを決め込んだことを察した真は、とりあえず、と口を開いた。

「あ、あ、そうだ。2年の宮田真」

「よろしく願います！」

「ああ」

それだけ言うと、真は素早くそつばを向いてしまう。

愛梨は頬を赤く染め、小さく雪緒に「すっごくかっこいいセンパイだね!」と耳打ちした。素直でわかりやすい子だ、と雪緒は思う。さてもう1人はどうするか、と雪緒が誠一をうかがっていた横で、愛梨は朗らかに声をかけた。

「あの、そちらのセンパイのお名前は?」

「あア?」

無視していた存在にまさか話しかけられるとは思っていなかったらしい誠一は、思い切り顔をしかめてみせた。怒っているわけではない、驚いているのだ。

「お伺いしてもいいですか」

にこつと誠一に笑いかける愛梨に、真と雪緒は目をむいた。

誠一の、あの顔を見て。

ひるむでもなく、おびえるでもなく。

笑いかけるなど。

「あ、ああ……。2年の坂上だ」

「坂上センパイ! よろしく願いますね。わ、すっごい豪華なお弁当! センパイのお母さんが作ったんですか!?」

「……俺だ」

愛梨はわあ!と歓声をあげて重箱をのぞきこむ。

「すごーい! お料理上手なんですネ。あたし全然ダメだ! うらやましいなア、ユッキーいつもこんなおいしそうなお弁当食べてるの!?」

「ゆ、ゆっきー!?」

「あ、ユッキーって呼んでるんです。ね!」

そう言って雪緒を振り返る愛梨は、寒空にはあまりに不釣り合いだった。

「うつそ、愛梨ちゃん、あのサカガミセイイチとご飯食べたの!？」  
「うん！ すっごく優しい人だったよ！ ご飯もおいしいかったし。  
へへ、ちよつと分けてもらっちゃんだー。宮田センパイはかつ  
こいいし、ユッキーはかわいいし、なんだか豪華なお昼休みだった」  
放課後、他の生徒と楽しげに話しこむ愛梨の姿は、雪緒よりもよ  
っぽくクラスに溶け込んでいた。

明るくて前向き、ちよつとおしゃべり。素直で、元気がよくて、  
人を色眼鏡で見ずに自分で見極めようとする。

自分に自信がある証拠だ。

雪緒にはとてもマネできない、春の太陽に似た笑顔。

雪緒は戦慄した。

そして同時に、大橋愛梨を絶対に許してはいけない敵と認識した。

雪緒にとって、何よりも完璧であつた正三角形に訪れた変化を自  
覚した瞬間だった。

## 第6話 3人組と乱入者（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第7話 ある日の真と雪緒

購買のパンと誠一の弁当で腹を満たした後は、眠りたがる雪緒の相手をして食休み。それが真の昼休みの過ごし方だった。

しかしある日を境に、昼休みは最も落ち着かない時間になってしまった。

「宮田センパイって生徒会の副会長だったんですね！　すごいなア、頭もいいし、運動神経も抜群だって聞きましたよ！」

「あ、あア……、ありがとう」

真は珍しく言葉につかえながら、なんとか礼だけ言った。しかし、だからなんだというのだ、という思いがこみ上げて口元がゆがみそうになる。

大橋愛梨という少女は、雪緒のクラスに転入してきた女生徒だ。

最初は「お邪魔します」と雪緒の後について来たのだが、今では雪緒を引っ張ってくる勢いだ。愛梨は物おじしない性格らしく、ぐいぐいと突っ込んで自分の居場所を確保していく。無邪気な満面の笑みは、拒絶や嫌悪といったあらゆる負の感情を跳ね返すばかりでなく、避けようとしたとたんこちらに罪悪感をもたらす。ある意味で最強無敵だ。

おかげで、真はまったく落ち着かない昼休みを過ごすこととなっていた。

「宮田センパイって何かスポーツやってるんですか？」

「いや。体を鍛えることは好きだが」

「おおー。見た目細いのに、実は筋肉がっしりって感じですよんねっ」

愛梨はおどけて細い腕で力コブを作ってみせた。

こういうところだ、と真は豚バラのキャベツ巻きを口に放り込むことでごまかした。

愛梨は人をよく見る。何を好んでいるか、何を嫌っているか、そういうものを見透かしたように相手の心に入ってこようとするのだ。

「ユツキー、どうしたの？ あ、このほうれん草の胡麻和え、甘くておいしいよ！ さすが坂上センパイだねー」

「ありがとう」

雪緒は、愛梨が差し出した誠一の弁当から素直にほうれん草をつまんだ。だがそんな態度とは裏腹に、雪緒からは冷え切った空気しか流れてこない。愛梨も気づいているからこそいろいろと気を遣っているのだろうが、効果はない。愛梨は困ったように笑うだけだ。そして次、とばかりに愛梨は誠一のほうへ向きなおった。

「坂上センパイ、このキャベツのつてどうやって作るんですか？」

「あ？ これは、キャベツをまず茹でてだな……」

「ータマ？」

「どんだけ食う気だ、バカ。一枚ずつはがすんだよ。この弁当の量だと8枚くらいだ」

誠一は得意分野の料理について珍しく饒舌に語っている。眉間のシワがうすくなっているのは気のせいではないだろう。愛梨はうんうん、と身乗り出して話を聞いていた。真の位置からは、体の大きな誠一が小柄な愛梨を受け止めているように見えた。

隣の雪緒が発する冷気が一層冷えたのを感じ取り、真はやれやれとため息をつく。愛梨が来るようになってから雪緒はすこぶる機嫌が悪い。

「雪緒」

とんとん、と肩をつつき、振り向いた雪緒の口に卵焼きを突っ込んだ。

「しっかり食べる」

「……」

も「も」こと咀嚼しながら、雪緒は真の目をじっとりと見返した。

「わ、もしかして、宮田センパイとユツキーって付き合ってるの！？」

愛梨のはしゃいだ高い声が室内に響く。

「何？」

「違うけど」

聞き返す真を無視し、雪緒は口の中のを飲み込んで返答した。

「え、違うのー？ お似合いだと思ったのに。ね、坂上センパイ？」

今まで何度となく言われたことだが、本人たちを前にして、誠一を前にしてここまでハッキリと言つてのけた人はいなかった。

残念そうな愛梨の背後にいる、誠一の目を真は見た。いつもどおりの重みと凄みのある視線だ。真は目をそらさずに言った。

「彼女のわけない」

そう、雪緒が俺の彼女のはずはない。

真は自分でハッキリと言いながら、心の中で確認作業を行っていた。俺と雪緒は幼馴染であつて、恋人のように男女として関わったことはない。

雪緒はそもそも、そういった恋愛事に興味をもっているのだろうか。雪緒は自分と誠一以外の他人には通じない無表情を維持しており、まともな友好関係が作れているのか、ということにすら真は疑問を抱いている。

雪緒のことは愛しいと思う。誠一にさえ言ったことはないが、雪緒の微笑みにドキリとさせられたことは一度や二度ではない。

だが、雪緒は真の恋人ではない。

雪緒が誠一の恋人でないと同じように。

雪緒は今日もタンクトップにジャージという、気の抜け切った格好で真の部屋に訪れていた。親ぐるみで気心の知れた仲であるから、家に来るのも顔パスだ。

「いいなあ、コレ。私も買おうかな」

と以前そう言いながらパンチボールで遊んでした雪緒に、「俺のを貸してやるからいつでも来い」と言ったのは真だ。

今日もいい音を立てながら遊ぶ雪緒を、真はベッドに座りながら眺めていた。基本的に後悔というものを知らない真であるが、今回はやはり軽々しく雪緒を自室に入れることを許可したことを悔やんでいた。

拳を出すのと戻すスピードが同じ、軌道もブレがない。理想的なフォームだ。ボクシング部に入っていないのが本当にもつたいない逸材。だがやはり体が開きがちになるのは教える自分が我流のせいだからだろうか。そういった冷静な分析を行いながらも、真は頭の一部が少し熱をもっていることに気づいていた。

軽いフットワークでしなやかに動く体。首筋を伝う一筋の汗。普段は真つ白な、少し色づいたほほ。下唇がぼてりと赤い、口元からもれる乱れた呼吸。

真が男だとわかつているのかいないのか、雪緒は無防備に軽装で来る。運動するのだから当然と言えば当然。しかしそれにしても警戒心がなさすぎる。

これを信頼と呼ぶか、なめられているのか。

誠一も最初はとめていたが、今では呆れながらの黙認状態だ。しかしどうしてもっと強く止めてくれなかったのか、とお角違いな恨みを抱かずにはいられない。8畳の部屋は十分広かったというのに、なぜ今になってこいつも狭く感じるのか。

もし今。

俺がこいつに触れたとしたら。



雪緒はどう思うだろう。

誠一は？

「は」

急にこちらを見た雪緒に、真は思考停止におちいった。

「真さん、何にも思わないの」

「何がだ」

体が震えそうになるのをなんとかこらえる。

「誠一さんのこと！」

なんとというタイミングで誠一の名前を出すのか、こいつは。

真はこめかみに銃口をつきつけられたような気持ちになった。

「大橋愛梨さんをどうにかしないと、誠一さんが取られる」

雪緒は乱れた呼吸を整えながら、吐き捨てるように言った。

「大橋さんみたいな人は危険だよ」

「危険？」

「今まではあんな風に誠一さんに接する人はいなかった」

雪緒はグローブをはずし、いらだたしげに真にむかって投げた。

「誠一さんはもともと世話焼き体質。ああいった子は気にせずには  
いられないはず。自分におびえたりしないってわかったらなおさら  
だ。　そうしたら！」

「そうしたら？」

「誠一さん、私たちじゃなくてあの子ばかりかまうようになるよ。  
大橋さんのための手袋、大橋さんのためのお弁当、大橋さんのため  
のあれやこれや……」

「そうだろうか」

真は必死な様子の雪緒に首をかしげてみせた。今までどんなに迷  
惑をかけても離れなかった誠一だ。今更大橋愛梨が出てきたところ  
で、自分たちの関係がどうにかなると思えなかった。

「真さんはノンキなんだから。よく考えてよ。誠一さんにベツタリ  
で面倒みてもらうことに慣れきった私と真さんと。笑顔炸裂でちょ

つと天然っぽくてまっすぐにイイ子の大橋さん！ 大橋さんは絶対『ありがとう、誠一さん！ 優しくて頼もしくってかつこよくて最高！ 大好き！』みたいなこと平気で言ってるよ！ どっち可愛がるかって言ったら私たちは完全敗北です！ 知ってるでしょう、誠一さんは恐竜怪獣よりも犬猫、犬猫よりもリスやハムスターが好きなんです！」

雪緒は悲愴な顔をして言った。

誠一が自分たちから離れる？ いつもの風景がふつと真の脳裏をよぎる。そこからぽっかりと自分と並ぶ人影が一つ消えるなんて。

「……そいつは困るな」

真は小さく首を横に振った。

「ちよつと視察が必要だ。俺は今から誠一のところへ行ってくる」

「ようやくわかってくれたんだね」

雪緒は鋭い眼差しをいくらかやわらげてうなずいた。

「いつてらっしゃい。私、もう少し遊んでいい？」

「ああ、好きに使え。水分補給を忘れずに」

真はそそくさと部屋を出ると、扉をしめてから大きく息を吐き出した。

『ありがとう、誠一さん！ 優しくて頼もしくってかつこよくて最高！ 大好き！』

真は扉を背にしてずるずるとしゃがみこんだ。耳の中でさきほどの雪緒の妙なモノマネが響き渡っている。

「……よからぬことは考えるべきではないな」

どうにか平静を取り戻そうと、誠一の家へ行く前に15分ほどランニングをすることにした。

このままでは、誠一の顔も雪緒の顔もまともに見れそうにない。

それは前から知っていた変化に、真が初めて向き合ってみた瞬間のことだった。

## 第7話 ある日の真と雪緒（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第8話 その日の誠一と真

誠一は、医者かカウンセラーのどちらを呼ぶべきか、と真剣に悩んでいた。

なんだってこの幼馴染は、冬空の下で汗だくになって我が家の玄関先で息を切らしているのだろう。

「せ、誠一……、は、は、は……」

「お前は変態か。それとも迷子か。ここは俺んちだ」

「知っている……は、は」

真はフーッと大きく息をつく、シャツの袖で額をぬぐった。

「話があるんだが、その前にシャワーかしてくれ」

「自分ちの使えばいいだろうが」

「雪緒がいる」

雪緒の名前を出されては引き下がるしかない。一応コイツにも恥じらいというものがあつたのか、としつぶと真を家に上げた。

湯気をたてている真を風呂場につっこむと、誠一は台所へ戻る。

明日の弁当の仕込みをしている最中だったのだ。誠一はじゃがいもの皮をむきながら、真がここへ来た理由について考えていた。

予想は付いている。

最近どうにも機嫌が悪い雪緒のことだ。

そしてなぜ機嫌が悪いかも、なんとなくわかっている。

誠一は雪緒に対してどんな思いを抱いたらいいのか測りかねていた。

嬉しい？ 照れくさい？

しかし、誠一の目元は緩むどころか陰しさを増した。

『宮田センパイとユツキーって付き合ってるの!?!』

『お似合いだと思ったのに』

やはり、これは後悔?

いずれにしても前々からわかっていたことだ。向き合う時が訪れた、ということなのだろう。誠一は静かに包丁を置いて、重箱を棚に仕舞い込んだ。じゃがいもは明日何かに使うことにしよう。

整然とはしているもののトレーニング機器が場所をとっている真の部屋に比べ、誠一の部屋は机と本棚以外にモノがなく殺風景だ。本棚にはまばらにしか本がなく、持ち主の嗜好はうかがえない。

真は迷うことなく椅子に向かい、ベッドに腰を下ろした誠一を見下ろした。勝手知ったるなんとやら、真は誠一のジャージを借りて我が物顔で部屋に居座っている。

「率直に言っぞ」

「ああ」

真はきっぱりと言った。雪緒には「偵察」と言ったが、そんな回りくどいマネは真にはできない。

「あの1年女子、どうするつもりなんだ」

「……どうするって」

予想通りの質問に、誠一は笑いをこらえるのに苦労した。どうせ真は1年女子の名前すらよく覚えていないに違いない。勉強はできる男だが、必要がないと思ったことに対してはとことん無頓着だ。大橋愛梨は完全に真の中でいらない人間と選別されている。

雪緒はそれをわかっている。

「お前がとられやしないかと、雪緒が不安がっている。ここ最近ずっと機嫌が悪いことは気づいてるだろう」

「そうか」

「そうか、じゃない。ハッキリした態度を見せてもらわないと、俺も困る」

真は誠一の煮え切らない答えが気に入らない、とばかりに眉をひそめてみせた。答えなんて決まっているだろう。そんな声が聞こえてきそうだ。自信に満ちて揺らがない真のその態度。

それが、誠一の心に大きな波をたてた。

「うるせえな」

「何？」

「なんでイチイチお前にンなこと言わなきゃいけないんだよ」

誠一は怪訝な顔をする真に問いかけた。地の底からはい出してきたような声音である。

「お前らはそうやってなんでもかんでも自分たちの言うとおりにさせてーのか。いい加減うつとうしいんだよ」

「誠一」

「毎度毎度ソレだ。誠一、セイイチ。俺はお前らの保護者でもなんでもねー」

誠一はこれ見よがしに大きなため息をついた。

「そもそも今までがおかしかったんだ。なんとか我慢して付き合ってたやってたが、人の色恋沙汰にまで口つつこむようなら終わりだな。お前らの束縛ももうこりこりだ」

「色恋？ そんなモノにするつもりなのか、お前」

誠一の発言でも何よりそのことに驚いた、と言わんばかりの真の反応にいささか拍子抜けしながら、誠一は続けた。

「いいか、真。俺はもうお前と雪緒には干渉しねえ。お前らもそうしろ。幼馴染とも思うな。2人で好き勝手やってろ。俺に二度と面倒かけるなよ」

話は終わりで、と誠一はベッドに横たわって手を払った。出ていけ、のサインだ。

しかし真は出ていかない。

「誠一」

「なんだよ」

「お前、あの1年女子とどうするんだ」

真はもう一度ゆっくりと誠一に尋ねた。誠一は寝転がったままジツトリと真を睨む。相手が真でなかったら、恐怖にひきつりながら逃げていくであろう眼光だ。

「お前らには関係ない。雪緒にもそう言っとけ」  
「ふむ」

眼鏡をかけなおし、真はまじまじと誠一を見据えた。憤りや困惑、あせり、怒り。誠一の予想に反して、真の目からそういった激情はまったくのぞけなかった。「何を言ってるんだ誠一、正気に戻れ！」とつかみかかってくることを想定していた誠一は、落ち着いている真に逆に不安を覚える。

「いいだろう。しばらく放っておいてやる」

「はア？」

「俺も思うところがあったからな」

あまりに傲岸な物言いに、誠一は本気で額に青筋をたてた。

何考えてんだ、コイツ。どこまで上から目線なんだ。

真は立ちあがって先ほど脱いだ自分の服をつかむと、素直に部屋を出る。そしてドアを閉める前に振りむいて言った。

「誠一、俺は予言する」

「……んだよ」

真の眼鏡は蛍光灯の光を反射して白く光った。

「お前は今以上に後悔する」

真の静謐な声が、せまい部屋の中でゆっくりと広がっていった。それはまるで誠一に死を宣告する死神のような音だった。





## 第8話 その日の誠一と真（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第9話 雪緒と真と生徒会長

気づくと右手はゆつくりと栄養補給ゼリーを握りつぶしていた。おかげで歩くたびに道路に点々とゼリーが落ちていく。

「道路はカロリー摂取しないぞ」

「真さんのバカ」

「いい加減機嫌を直せ」

「真さんのバカ」

「雪緒」

「真さんのバカ！」

雪緒は自分の左手を引いている真を罵った。真は呆然として動けなくなつた雪緒の手首をひつつかみ、無理やり引つ張つてきたのだ。「仕方ないだろう、誠一が嫌がつたんだから」

「真さんが怒らせたのが悪いんじゃない！ どうせまた無神経でどストレートな物言いしたんでしょっつ。まさかこんなことになるなんて」

雪緒の顔はいつも通り冷めているが、内心は焦りや不安がのたうちまわっている。よくよく見れば、瞳がゆらゆらと揺れていることがわかつただろう。それだけの感情表現さえ雪緒には珍しいことだった。

「朝に弱い誠一さんが先に行っちゃうなんて」

「驚きだな。おかげで雪緒も目が覚めたようだが」

「真さんはのんきすぎるっ」

今朝、真の携帯電話には誠一から『登下校も昼飯も別。校内でも今後一切つるむ気はない』というそっけないメールが届いていたのだ。昨夜の顛末を何も知らない雪緒がまさか、と何度も玄関のチャ

イムを鳴らしてみても、家人は誰もいなかった。雪緒は寝ぼけ眼を見開いて事の原因と思われる真に詰め寄ったが、真はいつも通りの態度を崩さない。

「メールも電話もくれない。っていうか着信拒否。どうしたらここまで誠一さんを怒らせられるの、真さん……」

雪緒は途方にくれたように携帯電話を見下ろした。何度新着メールの問い合わせをしても無駄だった。

「誠一さん、やっぱり大橋愛梨さんのこと……」

「雪緒。大丈夫だ」

「何が？」

真は雪緒を安心させるように微笑んだ。手錠のように手首をとらえていた手をゆるめ、今度はしっかりとつなぎなおした。

「俺を信じていろ」

雪緒と真は気づいていなかったが、真が雪緒に微笑みかけたときに叫び声がそこかしこで上がっていた。その大半は登校中の山城学園高等部生徒である。

「うそ、ついにあの2人くつついちゃったの!？」

「やだやだやだ、なんでえええええ!？ 宮田先輩……!」

「今まではサカガミに連行されるように登校してきたのに……!」

「あ、有边さん……!! 宮田はアレで安全牌だと思ってたのに!」

手をつないでいる。

熱く見つめあっている。

宮田真が優しい微笑み付で有边雪緒にささやいている。

そして何より、坂上誠一がいない!

3人組、カップル成立につき解散か!? との噂が校内をかけめぐるのに、たいして時間はいらなかった。

「ユッキー、坂上センパイとケンカしたって本当なの!？」

愛梨は雪緒が教室に入ったとたんに声をかけてきた。大きな瞳が悲しそうにうるんでいた。雪緒が今一番会いたくない相手だ。

「登校中に坂上センパイに会ったの。1人だったからユツキーたちはどうしたんですかって聞いたら……」

愛梨はためらうように唇をかんだあと、細い声で「あいつらとはもう関わらねーことにした」と誠一が告げたことを伝えた。

「ねえ、ダメだよ、ケンカなんて。あんなに仲いいのに」

誰のせいだ、と糾弾したい気持ちをおさえ、雪緒は黙る。口を開けば愛梨を傷つけることばかり言ってしまうそうだった。

愛梨はよほどショックだったようで、周りのことが見えていない。教室中の好奇の視線を浴びていることにどうして気付かないのか。

雪緒はこれ以上その話をここでしたくなかった。

「……あたしのせいだよ」

「え？」

まさか、自覚していたのか？ 雪緒が思わず聞き返すと、愛梨は真剣な面持ちで続けた。

「昨日、あたしが『宮田センパイとユツキー付き合ってるの？』なんて言っちゃったから。隠してたんだよね。だから坂上センパイ、怒っちゃったんだよね……」

「……え？」

野次馬の中に「やっぱり」とうなずく人がいることに気づき、雪緒は愛梨の『妄想』を理解した。

「でも、そういうのって隠されるとちよつと傷つくかも。あたしもそうだし、坂上センパイはもつとだよ。センパイ、かわいそう……」

愛梨はポニーテールをしゅん、と垂れさせた。雪緒はそれを冷やかに見下ろす。

「付き合ってない。隠してもいない」

「え？」

今度は愛梨が聞き返す番だった。

「昨日言った通り、私と真さんは付き合っていない。恋人じゃない」

「え、でも……」

「誠一さんと今日登校しなかったのは別の理由。変な憶測しないでしん、と教室が静まり返る。雪緒は周りから何を言われてもどこ吹く風、のスタンスをとっていたというのに、このように真っ向から嫌悪感を示すのは初めてのことだ。

びくつと体を震わせた愛梨は、まるで子リスのようだった。その仕草に余計に雪緒の苛立ちは増す。

「ご、ごめん！　なーんだ、あたしすっかり勘違いしちゃって。ごめん、ごめん！」

えへへ、と無理やり作り笑いをする、愛梨はおどけて舌を出して見せた。

「でもやっぱりケンカはだめだよ。お昼はどうするの？　一緒に食べるんだよね？」

一緒に？　それは自分のことも入れているのか。

おずおずと上目づかいにこちらをうかがう愛梨から目をそらし、雪緒は淡々と言った。

「しばらくお昼も別になるみたい」

「えっ！　そんなのダメだって！　時間置くと余計こじれちゃう」

愛梨はダメダメ、と首を横にふる。そして「あ、わかった！」と光さすようにパアッと笑顔を見せた。

「あたしにまかせてよ！　顔合わせづらいのはわかるし、でも仲たがいはしたまんまじゃもつとマズイし！　あたしが仲立ちする！」

ぐつと握りこぶしを作った愛梨は、鼻息もあらく宣言した。

「安心して、ユッキー！　必ず坂上センパイと仲なおりさせてあげる！」

雪緒は、あまりの衝撃に頭の中身がとろけだしそうな心地がしていた。

真の何を信じればいいのかまったくわからなくなった雪緒であった。

昼休み、いつもの空き教室へ行ってもやはり誠一の姿はなかった。落胆した後に雪緒と真が向かったのは生徒会室だった。あの場所は3人で過ごす場所だ。楽しい食事の時間でも耐えがたい喪失感に襲われてしまう。

「2人でココに来るなんて、珍しいこともあるもんねえ、宮田クン？」

「まあな。たまにはいい」

「よくないコもいるみたいだけど？」

やたら艶めいた唇で孤を描くのは、生徒会長の二本松清香である。黒いストッキングに包まれた足は理想的なラインを描き、パイプ椅子から投げ出されていた。雪緒と同じく完璧に校則通りの制服の着こなしなのだが、なぜか彼女の場合は独特のあだっぼさが醸し出される。

城山学園きつての英才と名高い清香は、圧倒的カリスマをもって生徒会長として君臨していた。口元のホクロが魅力的だが、発せられる言葉は誰もが耳を傾けざるを得ず、いつの間にか従ってしまっているという恐ろしい力をもっている。

彼女は3人組を「謎」としない、数少ない人であった。

「相変わらずバカやってんのねエ」

というのが彼女の3人への評価である。そしてこれは限りなく正解に近い。

彼女も校内の有名人であり、たいていは1人で生徒会室に居座っている。清香はひよいと顔をのぞかせた2人を部屋の主として歓迎したのだ。

「会長。真さんのせいで誠一さんが怒ってしまったんです」

「あら、それで寂しいのね、かわいそうな雪緒ちゃん。宮田クンさいてー」

「俺のせいじゃない。誠一が勝手に言い出したんだ。雪緒をあおる

な、二本松」

清香はクスクスと笑うと、雪緒の手元をのぞいた。

「でも、坂上くんお手製弁当がないせいでよりかわいそうになってるんだもの。雪緒ちゃんのお昼ごはん」

雪緒の昼食メニューは、ビタミン摂取のできるゼリー飲料と真が渡したメロンパンであつた。

「雪緒ちゃん、わたしのお弁当食べる？」

清香は折詰のような弁当箱を雪緒の前に差し出した。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

「そお？ 残念。わたしも雪緒ちゃんに餌付してみたかったのに」  
本当に残念そうな清香に、真は露骨に顔をしかめてみせた。

「雪緒ちゃんってホントかわいい。アンタらにはもったいなーい」

「二本松！」

「おお、怖い怖い」

清香はひょうひょうと笑った。

「ところで、坂上くんはどこに？ ってアラ、今度はこっちが怖い顔？」

雪緒の感情の変化をなんとなく感じ取った清香は、真に目だけで問いかけた。

「……誠一は、問題の1年女子と一緒にいる」

「へえ！ ホントに仲良しだったの、あの天然子リスちゃんと」

「天然子リスだと？」

「わたしとすれちがった時、『うわー、なんだかエロい美人……つてああああ！ す、すみません、失礼なこと言つて！ つい心の声だ！ センパイ、とってもキレイですねっ』って言われた。わたわたしながら」

「そうか」

あんなストレートに言われたのハジメテ、と清香は笑う。彼女はたいてい口元に笑みを浮かべているが、それが彼女の表情というもの隠している。内心どう思っている事やら、と真は嘆息した。



「雪緒ちゃんはそのコが気に入らないのね？」

「だって……」

雪緒はメロンパンのクッキー生地のみ剥がして口に運んだ。言い訳もしようがない。自分の狭量さには呆れてしまいが、それでも気に入らないのだ。雪緒はばつの悪さから、清香を見ることができない。

「いいの。ガンガンいじめてみせなさい。嫉妬して、涙ぐんで、わめいてみなさいよ」

「はい？」

「それが一番いいんじゃないかしらねー」

清香は漆塗りのハシを弄びながら歌うように言った。

「……雪緒にそんなことされたら、俺が誠一にどんな目にあわされるかわからないんだか……」

「でも、向こうから絶交されちゃってるんでしょ？　じゃあいいじゃない」

「む」

「おもしろいわよオ、絶対！」

ね、そうしなさいよ、と清香は雪緒にすり寄った。

雪緒の思案顔がまた真をあせらせる。

誠一、お前は俺の考え以上に後悔することになるかもしれないぞ。

真は心の中で幼馴染に語りかけた。

## 第9話 雪緒と真と生徒会長（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第10話 そのころの誠一と愛梨

城山学園高等部には広い中庭があり、生徒たちの憩いの場となっていた。周囲の花壇には花が植えられ、小さな池には鯉が泳いでいる。パラソル付のテーブルでおしゃべりに興じれば、気分もはずむことだろう。

ぽかぽかと暖かい春であつたなら。

「なんだってこんなところ呼び出すんだよ……！」

誠一は体をかくかくと震わせて愛梨を睨みつけた。

「せ、センパイ、すみません……！！　今が冬だということを失念していました……！！」

負けじと震えていた愛梨は、鼻をすすりながら校舎に戻ろうと指をさす。

昼休みになったとたんに誠一の携帯電話にかかってきた電話は、件の1年生・大橋愛梨からのものだった。いわく、「いっしょにお弁当を食べましょう」とのこと。

予定のなくなった昼休みであるし、誠一は深く考えずに了承した。とにかくあの2人と離れていればいいのだ。愛梨は場所をこの中庭に指定したのだが、花もなく池の水は凍りつくこの季節にはまったく適さない場所であつた。

すぐさま場所を移ることにした愛梨と誠一は、結局いつもの空き教室へと向かった。ちょうど真と雪緒が生徒会室に着いたころであつた。

「坂上センパイ、ごめんなさいっ！　まさかあんなに寒いなんて。」

へ、ふえつくしゅ！」

「外って時点で気付けよな……ホラよ」

しゅん、としおれる愛梨に、誠一はポケットから温かいココアの缶を差し出した。

「え？」

「寒いだろ。飲め」

「あ……ありがとうございます！」

愛梨はぱつと頬を染めて誠一からココアを受け取る。冷え切ったせいか、小さな指先が赤くなっている。

それを見て、誠一の脳裏にふつとよぎるものがあつた。あかぎれが痛々しい細い指。痒がって何度かはがしてしまうかさぶた。それでもクリームを塗らない無精者。俺がいなければ、彼女の手はあつという間にガサガサになつて……っていかんいかん！ 誠一はすぐさま首を振ってその考えを打ち消した。

「さつさと食うぞ。時間がなくなっちまう」

「はいっ！」

誠一はコンビニで買ったおにぎりとパンを取り出した。

「あれ……、今日はお弁当じゃないんですね」

そんな量で足りるのか、と心配になるほど小さな弁当箱を膝に乗せていた愛梨は、不思議そうに首をかしげた。

「しばらく手抜きだ」

「……ユッキーたちとケンカしたから、ですか」

大口をあけておにぎりにかぶりついていた誠一は、眉をピクリと跳ねあげて愛梨に顔を向けた。

「別にケンカじゃねーよ」

「でも！ もう関わらないって……」

愛梨はハシを置いたまま、大きな目を伏せてうなだれた。

「付き合いきれなくなっただけだ」

「でも」

「うるせえ。関係ねーんだから黙ってろ」

「……すみません」

「……さつさと食べ」

のろのろと食べ始めた愛梨は今にも泣き出しそうなほどだ。それを見てまたもや何かが頭に浮かんできてる。こみあげる何かを押さえつけるように、誠一は苦々しい思いでおにぎりを噛み潰した。

「坂上センパイ……」

「んだよ」

「あの、差し出がましいんですけど……」

「そう思うなら黙ってる」

「あつ」

愛梨はハシ先を口に当ててひるんでみせる。それでも黙る気はないようで、おずおずと愛梨は続けた。

「じ、じゃあセンパイはこれから誰とお昼食べるんですか……。ユツキーと宮田センパイは2人だけど、坂上センパイは1人になっちゃうし」

「ほっとけ」

「ほっとけませんよ！ あ……、そうか」

「あ？」

「あたしがいるじゃん！」

「はアあ？」

「坂上センパイ、あたしと食べましょうね！」

「いや、今食ってるだろうが」

「これからですよ！ 明日も、明後日も！ ね、そうしましょう！ あたしもお弁当づくりがんばりますから！」

愛梨は輝くような笑顔を見せて、拳を突き上げてみせた。

「センパイ、今度からは名字じゃなくて、誠一センパイって呼んでいいですか？ あたし、センパイともっと仲良くなりたいです」  
今度は祈るように手を組み、誠一を上目づかいにのぞきこんだ。  
お願いお願い、と愛梨はおねだりをする。

こんなお願い、当然ながら誠一には初めてのことだった。後輩に

懐かれたこともない。親しげに「名前で呼んでいい!？」なんて言われたこともない。どうしていいのかまったくわからなかった。いきなり元気になってぐいぐいと突っ込んできた愛梨の勢いにのまれ、誠一は思わずうなずいてしまう。

「やったー!!! じゃあ誠一センパイ、よろしくお願いします!」

「……というワケで、あたししばらく誠一センパイとゴハン食べるね! ユッキー、誠一センパイのご機嫌がなおるまで、ちよつと待っててね!」

「……そう」

意気揚々と教室に戻ってきた愛梨に、殺意をかくしきれなくなってきた雪緒であった。

## 第10話 そのころの誠一と愛梨（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第11話 さらにその夜の真と雪緒

誠一から絶縁を言い渡され、愛梨から笑顔爆弾を落とされた日。

雪緒は今夜も真の部屋にいた。幸いなことに、今日は大きなパーカーにキュロットパンツといった格好なので真もヒヤヒヤせずに済んだ。そんな真の気も知らず、雪緒は真のベッドに寝転がったままピクリともしない。ストレス発散のパンチングボールには見向きもしなかった。

よほど衝撃だったらしい。

真は仕方なく床に直接腰をおろし、ベッドに頬杖をついていた。

「雪緒」

返事はない。

「おい、雪緒。返事くらいしろ」

体をゆすると、雪緒はぼんやりとこちらを向いた。

「真さん、お腹がぐるぐるする」

「腹が減ってるのか」

「減ってない」

雪緒はまたぶいっとそっぽを向いてしまった。さきほどからずっとこの調子で、会話が成立しない。真は雪緒をあやすようにゆすつた。

「雪緒。俺はちゃんと言ってくれないとわからない」

俺は誠一ではないのだから、と暗に伝えたつもりだ。

「……ごめんなさい。スネてたの。でもお腹がぐるぐるしてるのは本当。私ってこんなに嫉妬深かったんだ」

「嫉妬？ あの1年女子にか」

「うん。誠一さん、私たちとじゃなくて大橋愛梨さんとお昼食べるんだって」



雪緒はそれだけ言うと、また枕に顔をうずめてしまった。真は、なんとなく雪緒の腹のぐるぐるとやらがわかるような気がした。だが、雪緒のそれよりも少々複雑だ。なにせ自分の腹の中の渦は2つある。雪緒の手前表には出さないが、内心では忸怩たる思いを抱えていた。

誠一は、自分たちよりもあの1年女子といったほうがいいというのか。これまで17年間ずっと一緒にいて、今更何を言うのだ。

そして雪緒。お前は俺がそばにいるというのに、どうして誠一のことばかり気にする。もしも俺がそばを離れたら、今と同じように嫉妬してくれるのか。

これは真のプライドの問題だ。軽々しく口には出せない。こんなにグチグチと悩むのはガラではないが、考えずにいられないのが辛いところだ。また走りこみにも行こうか、と腰を上げかけたところで、思いもよらない言葉が雪緒の口から飛び出した。枕のせいで少しばかりくぐもってはいしたが、真の耳にはハッキリと届いた。

「大橋さんが真さんを気にいってくればよかったのに」

「……なんだと」

目の前が真っ赤になったような気がした。

今までに抱いたこともない感情が、何よりも大切な幼馴染へと向けられている。真はそのことに驚きつつも、自分を抑えることができなかった。

「もう一度言ってみろ」

うつ伏せになっていた雪緒の体をひっくり返し、肩を押さえつけるのは簡単だった。驚いている隙に馬乗りになってしまえば、もう雪緒は起き上がれない。

これで雪緒はココから動けない。真は奇妙な満足感を覚えたが、まだ激情はおさまらなかった。

「俺が離ればよかったとでも？ お前のそばには、誠一がいれば

いいのか。お前らに俺は必要ないか」

雪緒は右手をつっぱって真の体を押し返そうとする。しかし真はその手首をも捉えて雪緒の抵抗を封じた。

「言え」

真は雪緒の手首をつかむ左手にゆっくりと力をこめた。いや、こめようとした。

しかし、雪緒の凪いだ瞳に自分がうつっていることに気付くと、おさまりがつかなかった気持ちだが、現れたときと同様急速に消えていった。

雪緒はおびえても、怒っても、呆れてもいなかった。おだやかに真を見据えている。

真は力をこめるかわりに自分の顔を雪緒の鼻先に近づけた。眼鏡が邪魔だ、と真は思った。

バッシン！

乾いた小気味よい音が部屋に響く。

「……痛い」

「だから私は真さんならよかったのにつて言ったの」

雪緒はふん、と鼻をならした。真の頬を叩いた右手をさすりながら、真をぐいっとどかせて起き上がった。真の拘束はとつくにゆるんでいた。

「バカな勘違いしないで、真さん。私は真さんがいなくなるなんて考えてないんだから」

雪緒は淡々と言うと、ベッドの上で正座した。つられて真もあぐらをかいて向きなおる。

「真さんの場合は、もし大橋さんのような女の子が来ても大丈夫だと確信してるの」

「確信？」

雪緒は大きくうなずいた。

「今までどんな相手から告白されようが、まったくなびかなかった真さんだもん。もしも大橋さんに2人でお昼いっしょ食べましょいうて言われたら真さんどうする？」

「君といると疲れるから、申し訳ないが遠慮してくれ、と言う」

「ほらねー」

雪緒は、真の少しだけ赤くなった頬をなでた。真は何が何やらわからない、という顔だ。しかし雪緒はおかまいなしだ。むしろご機嫌は上向きになっている。

「それに、さっきので確信は深まったから。真さんはわかりやすくいい」

「……………」

ばかにされているな、と思ったが、先にばかなことをしたのは真のほうだ。ここはおとなしくしておいたほうが身のためだ。

「真さんはちゃんと妬いてくれるでしょう」

「妬く？」

「誠一さんと、私の両方」

雪緒は口角をほんの少しだけ上げて見せる。淡く色づいた唇が目にとまり、眼鏡なんぞに気を取られるのではなかった、と真は悔しく思っただった。

第11話 さらにその夜の真と雪緒（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第12話 愛梨と雪緒

金曜日の放課後、教室前の廊下を掃除しながら愛梨は懸命に口を動かしていた。ここの当番は愛梨と雪緒の2人だけだったので、気兼ねせずおしゃべりをしていられる。

「誠一センパイってやっぱり優しいよねー！ あたしのヘタクソなおにぎり、ちゃんとおいしいって食べてくれたんだよ！ すっごく嬉しかったー」

「そう」

「あたしが甘いもの好きって言ったら、イチゴミルクおごってくれたの、おにぎりのお礼って！」

「へえ」

「誠一センパイ、お菓子作るのも得意なんだってー。あたしも食べてみたいなア。今度お願いしてみようつと」

愛梨は思わず顔がゆるんでしまう、といった具合に頬に手を当てて微笑んだ。冬の寒さなど感じさせず、のぼせたように雪緒に語っている。

雪緒は必要最低限の相槌しか打たない。しかし、愛梨はまったく気にならなかった。自分の中の誠一のことと胸がいつぱいだったからだ。

まさか、転校先でこんなステキなことが起こるなんて！

愛梨ははしゃいでいた。

転校初日に出会ったクラスメートは、愛梨が今まで会ったことがないほど綺麗な女の子だった。ショートカットで凛とした雰囲気を持ちつつも、愛らしさは損なわれていない。口下手でクールなところ

るがまた魅力的だった。愛梨はこの子と仲良くなりたい！と強烈に思った。慣れていけば、きっと満面の笑みを浮かべて心の壁を取り払ってくれるに違いない。そのときこそ、あたしたちは本当の友達になれる。

そしてそんな雪緒の幼馴染だという真と誠一。真はまさに人気者の優等生といった感じで、好感を持てた。文武両道の尊敬すべきセンパイなのだろう。そして誠一！ 外見は確かに強面だ。それで学園中から怖がられている。しかし本当はとっても優しくて心配りのできる、ステキなセンパイ。

何やら縁があって2人で過ごす時間が増えたが、日に日に誠一の良いトコロが見つかっている。

今では昼休みが一番好きな時間だ。

みんなが知らないセンパイをあたしは知っている！

誠一のことをもっと知りたい。誠一は、自分のことをどう思っているのだろう。

愛梨にとって初めての気持ちだった。

今までだったら、「こんなにステキなセンパイのこと、みんな誤解してる。本当のことを知ってもらわなきゃ！」と奔走していたところだろう。しかし今の愛梨は違った。

できるなら、あたしだけが独り占めしたい。あたしだけが、知っていたい！

否定していたものの、やはり真と雪緒はお互い好き合っているようにしか見えない。これを機におそらく2人は想いを打ちあけるだろう。

そうなったら幼馴染として、ユツキーはきつとあたしに協力してくれるはず。

愛梨は全てがバラ色に見えていた。そのフィルターを通した雪緒は、愛梨にとってきつかけを作ってくれた天使だ。

「……ところで、誠一さんのご機嫌なおった？」

愛梨は、雪緒のその一言に凍りついた。

そもそも雪緒・真と誠一の仲をとりもつために誠一のところに行った愛梨だ。

それがどうした。自分はこの一週間、誠一に雪緒と真のことを説得しようとしたのは初日の月曜日の一度きり。それ以降はかたくなに誠一が拒んだからであるが、愛梨が誠一との時間を楽しむ方に熱を注いでしまったことが一番の原因だ。

なめらかに動いていた口が、いきなり重くなってしまう。

「あ……、あの、ユツキーごめんね。あの、あの、誠一センパイはまだ2人と口利きたくないみたいで」

「なぜ？」

「やっぱり、たぶん宮田センパイとユツキーのことじゃないかなア」  
「私たちのことって？」

「だ、だから、2人が付き合ってるってことに気を遣って……」  
「違うっていう誤解を解いてくれるために誠一さんのところに行ってくれていたんじゃないの？」

雪緒は愛梨に背を向けて、隅のごみをほうきで掃いた。

「あ、いや、あのね…… やっぱり、正直に言っただほうがいいよ。きっとそういう態度が誠一センパイ怒らせてるんだと思うよ」

厳しいことを言うようだが、ここはハッキリ言っておかなければならない。愛梨は急に使命感にかられた。あの誠一の優しさは、怒っているようにみせかけてじれったい2人を応援しているに違いない。ならば愛梨もそれを後押しするのが誠一のため、みんなのためになるというものだ。

「たぶん、きつと、思うよ」

雪緒はゆつくりとつぶやいた。

「ねえ、それって誠一さんから直接聞いたの？」

「え？」

「なんだか誠一さんの話っていうより、大橋さんの推測にしか聞こ

えなかったから」

雪緒は愛梨に向かってしつとりした流し目を向けた。思わず同性である愛梨がドキリとしてしまうようなものだった。そのせいで雪緒の言葉のトゲに気付かない。

「え、えつと……あたし、がんばるから！ ごめんね、ユッキー」  
何をがんばるのか、なにがごめんねなのか。愛梨はとにかくこのきまずい空気を終わらせたかった。

「いいの。気にしないで」

雪緒はそれだけ言って掃除用具を片づけ始めた。

「じゃあさよなら」

愛梨が浮かれてしゃべり続けている間に掃除は終わっていたらしい。雪緒はモップ片手に立ちつくす愛梨を置いて帰って行った。

雪緒に対し、天使とは違う一面を見たような気がした。しかし愛梨はあえて見なかったこととする。

だって、あたしは雪緒の友達だから。

こんな気持ち、友達に対して抱いていいものではないから。



## 第12話 愛梨と雪緒（後書き）

あけましておめでとうございます！

年をまたいでしまいましたね。間が空いてしまつてすみません。

本年もよろしく願いたします。

ご意見・感想をお待ちしています。

### 第13話 誠一と真 その1

誠一が真と雪緒に絶縁宣言をしてから、2週間がたった。朝も、昼も、夜も。誠一は真と雪緒に会っていない。

日曜日、家から一步も出ず、1人でのんびりと過ごす。

誠一の母親はバリバリのキャリアウーマンであり、休日返上で働いていた。誠一がのろのろと起きだしてきたときには、家の中は静まり返っていた。

だから今日は誰とも口を利いていない。誰かの行動に気をもむことも、叱りつけることもしないで済んだ。誠一は自室でくつろぎながら、しみじみと1人の時間を感じ入っていた。

携帯電話は電源を落としたままだ。もともと連絡が来る相手は限られている。

静かだった。

買った方がいいがページを開かないままだった手芸雑誌を広げ、コーヒ一片手にページをめくる。と、誠一の目にとまるものがあった。春先に使えそうな、簡単な手編みのニットマフラーだ。細身で伸縮性があり、使い勝手がよさそうである。つまり、多少乱暴に扱っても大丈夫ということ。力任せで大雑把な真にはちょうどいい。「もう暦では春だ！ 寒いなんて軟弱なこと言ってられるか！」と薄着で飛び出そうとするバカを押さえつけるのは自分の役目で、動きをとめたスキに雪緒がコートやマフラーを装着させる。そんな毎年恒例のやり取りが思い出され、ふっと誠一の口元がゆるむ。

次に気になったのは、手芸にまったく関係ない『冬の手荒れ対策特集』だ。専用のクリームや絹の手袋、保湿剤といった様々なものが紹介されている。そういえば、雪緒の手はどうなっているだろうか。ぱっくりとひび割れた小さな指を見るのはあまりに忍びない。

澄ました顔で我慢して、耐え切れなくなっってからビービー文句を言う雪緒の顔が頭に浮かぶ。しかし、小さなことはまったく気にしない真では雪緒の痛みに気づいてやれないだろう。

「………… いやいやいや。もう関係ねーだろ」

誠一は熱いコーヒを一気に喉に流し込んだ。

たった2週間だ。まだそれしか時間は経過していない。

それなのに、なんだってこんなに落ち着かない！

苛立ちを抑えるように雑誌を放り投げた誠一は、何か気を紛らわそうと立ちあがった。しかし、何をしたらいいかわからない。料理だって食べるのが自分とあってはやる気がでない。雑誌も読んでいられない。やりたいこともない。どういうことだ。

なぜかと言えば簡単だった。真と雪緒が勝手に寄ってきて、散々振り回し、誠一は後始末に追われる。それが誠一のいつもの過ごし方だ。自分からこれといった行動を起こさない誠一1人では時間をもてあますばかりだ。

学校がある間はよかったが、休日では何もすることがなくなってしまふ。

自分という人間のつまらなさにはつくづく嫌気がさす。

そしてふと、真が自分に言ったあの言葉がよみがえってきた。

『お前は今以上に後悔する』

いや、違う。俺は後悔しないためにこうする道を選んだはずだ。納得したはずだ。

今、俺が後悔していることとは？

そこへ、来客を告げるチャイムが鳴った。いつもなら居留守を使うのだが、この時間つぶしになればなんでもいい。勧誘だろうがセールスだろうが出てやろうではないか。そう思って誠一はインタ

ーフォンも確認せずに玄関を開けた。

「よう」

「……」

そこにはいつもと変わらない真の姿があった。

誠一は無言で扉を閉めようとしたが、悪徳セールスよろしく真は靴の先をつっこみ、無理やり体を押しこんできた。

「いきなり何をする。さっさと入れろ」

「何してんだよ、お前はよオ……！」

「しばらく我慢したからな。もういいかと思って」

「もういいとかじゃねえっつの！ 何しに来た！」

「お前に会いに来たにきまつてるだろう」

悪びれた様子もなく、というか悪いとはまったく思っていないのだろ。真は真顔で誠一に「何を言ってるんだコイツは」という視線を向けた。

「来るなつつたろーが！」

「だから来なかっただろう、2週間も」

「ずっと来るなって意味だよ！ 通じてねーのか、お前は！」

「何、ずっと？ なんだそれは。期限をキチンと言わないお前が悪い」

眼鏡のズレを直しながら淡々と言ってくる真には殺意を覚えなくもない。しかし、こんなバカげたやり取りに安心していている自分がいる。

真はさっさと2階の誠一の部屋にあがりこむ。誠一はその背を追いかけるしかなかった。

認めたくない。だが、確かにこれは誠一が望んでいたことだった。いつも突飛な行動をしてくる真がいなければ、誠一は動けない。何もできない。だが、真がそばにいるならば、誠一は真の心配をしていればそれでいいのだ。誠一はさきほどまでの悩みが一気に吹き飛ぶを感じた。

そして、はたと気づく。

真の言っていた『後悔』の正体とは、自分の価値の喪失？

「やはりここは落ち着くな」

「人の家でくつろいでないで帰れ！」

真は腕を組んで言い放った。

「それでも俺と雪緒は気を遣っているんだぞ。お前が近づくなど言うから！」

「何イ？」

真は「誠一のワガママに付き合っでやるか、しかたないなア」というスタンスを崩さないつもりだ。

誠一が苦々しく聞き返すと、真はフンと鼻を鳴らした。

「俺が1人で来たことが何よりの証拠だ」

誠一の頬がひきつった。凶星だ。

実はこの絶縁宣言で、何よりも恐れていたことは雪緒の襲撃だった。誠一は雪緒との接触を徹底的に避けていた。それが功をなしたのか、と思っていたが、なんと自重していたらしい。

「雪緒もわかってるから、我慢しているんだぞ。それなのにお前ときたらメールも電話もしないで。雪緒がスネてグレてどうしようもない。俺のところに来てグズグズグズ言っている。いい加減にしてくれ」

「……お前がいるんだからいいだろうが」

「よくないに決まっているだろう。俺が煮詰まる。この前なんか頬叩かれたぞ」

「はア？ 雪緒が？」

やれやれ、と芝居がかった動きで肩をすくめる真に、誠一は思わず尋ね返した。雪緒はすぐヘソを曲げるが、真や誠一に対して暴力をふるうことはめったにない。つーんとそっぽを向いてすねるのが関の山だ。

「ま、俺が無理やり押し倒したのが悪いんだが」

ガタン、と何かがひっくり返る音がした。真が座っていた椅子だ。真の顔はなぜか誠一の眼前にあり、形のよい眉をひそめている。

それからようやく気付いた。

誠一は、反射的に真の胸倉をつかみ上げていたのだ。

「真……。お前！」

ぐつと締め上げようとしたが、その前に真は誠一の手首をつかんで力をこめた。真の体は細身だが、それは無駄なものが一切ついていないからだ。体格では多少劣るが、力勝負では互角といっている。誠一。なぜ熱くなっている。離れるなんて言わずに口出ししたくなっただか」

「口出しとかじゃねー。常識的な問題だ。女に無理やりなんて、何考えてやがる。お前はそこまでバカだったのか！ 雪緒はどうしてる！」

真は誠一の手を引き離すと、軽く笑って言った。

「落ち着け。あいつはいたって健康だ。誓って言うが、何もしちゃいない」

「あア！？」

「あいつがお前のことでグダグダ言うから、俺が少しばかり怒ったんだ。だが、お前もわかるだろうが、あいつ相手じゃどうにも怒っていらなくなる。それで気を抜いたとたん間髪いれずに平手打ちされた。さすが雪緒だ」

「……そーかよ」

最悪の事態が起こったのか、と頭の中でとんでもない想像をしてしまったが、よくよく考えれば単純な真としたたかな雪緒だ。どちらが強いかなんてわかりきっている。

「安心したか」

「バカ野郎」

気が抜けて、大きなため息が心の底からこみあげてきた。そんな誠一に、真は言った。

「だから後悔すると言ったんだ」

「なんだと？」

「お前、気になって仕方がなかっただろう。落ち着かなかっただろう」

真の得意げな顔にイラついて仕方ない。誠一は口元をひんまげて真を睨みつけた。

なぜならそれは真実だからだ。

何をしているか。面倒は起こしていないか。バカなことをしていないか。

今だってそうだ。真のとんでもない発言に対して瞬間的に誠一は思った。

もしも自分がそこにいれば、真の憤りを歪みなく受け止めてやれたのに。雪緒を助けてやれたのに。

それはまぎれもない『後悔』だった。

「2週間は耐えた。俺たちも、お前も。だが、もう破たんしそうだ。バランスが悪くて仕方がない。落ち着かないんだ。わかるだろう。」

お前は耐えられるのか、これからずっと？」

挑戦的な笑みだ。

誠一は何も答えられなかった。

第13話 誠一と真 その1（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。



## 第14話 雪緒と愛梨 その1

真が誠一の家に押し掛けているころ。

出無精の雪緒は、珍しく1人で外出していた。駅前はせわしなく人が行き来しているが、雪緒はこの地域の名物であるまんじゅうをモチーフにした丸っこいキャラクター像の前に立っていた。

キャメル色のコートとマフラーに手袋、と防寒対策はばっちりなのであるが、強い風がようしゃなく雪緒にふきつける。風除けの真と誠一がいけないことがこんなところにまで影響するなんて、と雪緒は理不尽な苛立ちにかられていた。

といつても、雪緒のイライラの原因は寒さばかりではない。待ち合わせの相手にあった。

「ユツキー！ ごめんね、待たせちゃった？」

甲高い声を発しながら小走りに駆けよってきたのは愛梨だった。厚手のケープにふわふわのスカート、ちよつとヒールの高いショートブーツ。走ってきたからか、それとも寒いからか、頬が赤く染まっている。ポニーテールはいつも通りだが、私服の愛梨は制服のときよりも一層華やかに見えた。

「うっん、大丈夫。今来たところ」

雪緒はこっくりとうなずいてそれに応えた。

「よかった！ 寝坊しちゃってさー、もう大慌てだったんだよ。ね、どこ行こうか」

とりあえず2人で歩き出したのはいいが、愛梨は行き先をまったく考えていないらしい。

「遊びに行こう」と誘ってきたのは愛梨のほうだった。断つてもよかったのだが、電話してきた愛梨の声になんともなく思うところがあ  
り、雪緒は誘いを受けた。

「私はどこでもいいけど」

「うーん、あたしも！」

えへへ、と笑う愛梨に影は見えない。思いすごしだったか、と雪  
緒は首をかしげた。

「とにかく寒いし……。あそこ入ろうか」

雪緒は若者向けのショッピングビルを指さした。愛梨も異論はな  
いようで、楽しげにうなずいている。

「こうしてユッキーと外で会っの初めてだね！　なんか楽しくなっ  
ちゃう！」

「そうだね」

たまには女同士で買い物もいいだろう、と雪緒も気分を切り替え  
ることにした。相手が愛梨であっても、ずっとイライラしているの  
は疲れる。ここは少し様子見た。

もし彼女に何か考えがあるのなら、きっとアクションを起こすは  
ずだ。雪緒はそれ待つことにした。

雑貨・服・靴。雪緒と愛梨はのんびりと店をのぞいてまわった。

かわいいを連呼して騒いでいるのは愛梨だけだったが、雪緒もそれ  
なりに楽しんでた。女性的な分野の買い物は1人で行くほうが気  
が楽なのだが、連れがあるというのも新鮮な気分だった。

愛梨は笑顔をふりまき、近寄ってきた店員ともすぐに打ち解けて  
話し始める。だがそれに流されて購入はせず、雪緒を連れて上手に  
ショッピングを楽しんでいる。

「資金のないあたしたちは何買うかはよく考えないと！　向こう  
の笑顔は財布のヒモ解除装置だからね！　気をつけなきゃダメだよ、  
ユッキー」

「大橋さんって思ったより器用だね」

「えー？ 思ったよりって何よー」

愛梨はうりうり、とひじで雪緒をつついてきた。くすつと雪緒に笑みがこぼれる。とはいってもほんの少し口元がゆるんだだけなのだが、愛梨はめざとくそれに反応した。

「あつ、ユツキー笑った！」

「え」

「ユツキーいつも顔固いからさー。笑うとめちゃくちゃかわいいのにもったいない！」

愛梨は輝くような笑顔を浮かべて言った。

「さて、次のお店行こうか！ あ、あそこ並んでるティーポットかわいー！」

愛梨は雪緒の手をひいた。「どこでもいい」と言っていたわりに、結局は愛梨のペースで行動は決まっている。

悪い気はしなかった。雪緒も女友達がいらないわけではない。真や誠一抜きで遊びに行ったこともある。しかし、雪緒の鉄壁のごとき厚い精神的壁を無理やり乗り越えようと試みてきたのは愛梨だけだった。

鋭すぎる拒絶にも嫌味にも耐え抜き、昼休み以外は雪緒にまとわりついている愛梨は、今や雪緒とセットで扱われていた。でこぼこ仲良し、と見られているのだ。

面倒で、うとましくて、離れたくて。

人の感情に鋭いらしい愛梨が気づいていないはずなのだが、それでも愛梨は雪緒のそばにいた。

やかいだと思う気持ちは変わらない。愛梨のまつすぐさや底抜けの明るさは雪緒にはないもので、イライラさせられる。

それでも雪緒は思う。

もし、彼女が私たちの関係の中に入り込もうとしなければ、良い友達になれたかもしれないのに。

休憩しようか、と喫茶店に落ち着いた2人は、温かい紅茶とケー

キを前にほつと息を吐いた。

「歩いた〜！ 結局何も買ってないし！」

あはは、と愛梨は声を出して笑う。それに雪緒はそうだね、とうなずいた。

それからのんびりとケーキを楽しみつつ1人しゃべっていた愛梨だったが、急に黙り込んだかと思うとおずおずと雪緒の顔をのぞきこんできた。

「……そういえば、さ」

雪緒は、来たな、と思った。

「誠一センパイのことなんだけど」

「誠一さんがどうかした？」

「えっと……」

あれだけはしゃいで飛び込んできたかと思うと、急にしおらしくなつてこちらをうかがう。ずつと機会を狙っていたのだ。悪いわけではない。こういった賢しさは誰でも持ち合わせているものである。呆れるほどわかりやすい愛梨はむしろ素直であるといえる。

「あたし……実は今日、話したいことがあって」

「うん」

知ってるよ。

雪緒は声に出さずつぶやいた。

いよいよ、決着をつけないければならない。

第14話 雪緒と愛梨 その1（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第15話 誠一と真 その2

真は黙ったままの誠一に対し、仕方がないとばかりに首を振った。  
「だんまりを通されたら、もう俺にできることはないな。最終兵器を出すしかない」

「あ？」

真は携帯電話を取り出すと、どこかへ電話をかけ始めた。  
それを見て誠一はビクリと背筋を震わせる。

「ま、待て！ それはまだ早い、わかった！ 少し待て！」

誠一は飛びかかるようにして真から携帯電話を奪い、電源を落とした。それだけで誠一は肩で息をしている。真はもう一度鼻をならすと、鷹揚に手を振った。

「そうだな。まずはアイツ抜きで話そうか」

この野郎、と誠一は手の中の携帯電話を握りつぶしそうになった。まったくもって憎たらしい男だ。

しかし、ここでアイツに登場されては困るのだ。誠一はおとなしく従うしかなかった。

「なア、真」

「なんだ」

「お前、雪緒が好きか」

「好きだ」

「そうか」

思わず誠一は笑ってしまった。あまりにも率直な問いかけに我ながら恥ずかしくなったが、それ以上に率直な真の答えが誠一を動かした。まわりくどいことは真には通じないだろうし、もう面倒になつてしまったのだ。真相手に取り繕おうとする自分がおかしかった。「真、頼む。俺が心配しなくていいくらい常識持て。それで雪緒の

そばにいる」

「俺が非常識みたいな言い方するな。で、お前はどこにいるつもりだ」

「どっかその辺」

「お前は俺の話聞いてたか？」

真が眉間にシワを寄せるが、反対に誠一は苦笑いした。

「雪緒はお前になら任せられるって言ってるんだよ、真」

「お前は雪緒の父親か。お前こそどうなんだ」

「……ふん」

「いい加減認める。俺は最近自覚した」

「最近！？」

「ああ。信頼できる幼馴染から、もう一段階上がりたいと思うようになった。雪緒がお前のことで愚痴を言うようになってからだな。ある意味お前のおかげだ」

「おいおい、マジかよ……」

誠一は呆れたようにつぶやいた。

本人は隠していたつもりかもしれないが、真が雪緒に対してそういった感情を抱いているのは誠一にはお見通しだった。だが、真は恋というものを自覚しきれていなかったらしい。

「で、俺がそうなんだからやっぱりお前もだよな、誠一」

「お前みたいな単細胞と一緒にするな！」

「一緒だ。お前は雪緒が好きだろう」

当然だろう、と言い切られて、誠一は肩をすくめてうなずいた。

「そうだな。好きだ」

「それなのになんだって遠ざける。今まで通りでいいじゃないか」  
「そうはいかねーだろ」

あの停滞した空気が心地よかった。真がいて、雪緒がいて。しかし、その状態で誠一と真の2人から想いを向けられれば、雪緒はどちらの手もとれなくなってしまう。そうなったら3人でのいるのは辛

くなるばかりだ。

真と雪緒が苦しみ悩む。

誠一はそれを恐れていた。

ならば話は簡単だ。

1人、いなくなればいいのだ。

それは雪緒への思いを自覚した4年前からずっと考えていたことだった。

「あの時、俺があいつらから離れていれば」と悔やむことが怖かった。それが、誠一の避けようとした「後悔」だ。肝心なのはいつが「あの時」になるのかを見極めることだった。

先延ばしにしているうちに時が流れてしまったが、誠一はようやく踏み切るきっかけを見つけた。

大橋愛梨だ。

彼女が真と雪緒を似合いだ、と評価して同意を求められたとき、誠一は決心した。

だだをこねられることはわかっていたが、それも時間が解決してくれる。自分がいなくなっても、真と雪緒が互いだけが必要とするようになれば、何も問題はないはずだった。

「身を引いたつもりか」

「氣にいらない、と真は目元を険しくした。

「別にそういうんじゃないよ。俺よりお前のほうが雪緒に合う」

「相手は雪緒だ。俺だけじゃ手に負えない」

「なんとかなる。俺がいけないのに慣れるよ」

誠一が困ったように笑ってみせるので、真は我慢できなくなった。もう落ち着いて話してなんていられない。懸命にはりつけていた冷静な仮面は、もうとつくにはがれおちていた。

「慣れるわけないだろう！　そうやってお前は雪緒だけでなく俺か



「私も離れようとするんだ！」

真は立ち上がり、ベッドに座った誠一を見下ろした。誠一の睨みは重々しい鈍器に似ているが、真の睨みは突き刺さる槍のようだった。

「俺はお前がいないとダメだ。隣が落ち着かないんだ。雪緒が好きだとかどうとかは関係ない、俺の隣にはお前がいるべきなんだ！そうでなければ……」

勢いはよいものの、真の顔はくしゃりとゆがんで頼りない。まるで帰り道を失った子どものような顔だ。

「俺はどうしたらいいのかわからない」

真の言葉が誠一の胸につきささる。

お前もか。俺だけじゃないのか。

たまらない喪失感に襲われ、何もできずに動けなかったさっきまでの自分と、好き勝手に動き回っていると思っていた真が重なる。

俺には真が必要で、真は俺が必要か。

くだらない依存だったが、誠一と真には何よりも代えがたいものだった。ある意味では雪緒への恋慕を断つよりも辛い。

誠一はようやくそのことに気付いた。

また1つ、新たな「後悔」を発見してしまった。

こうしていれば芋づる式に見つけてしまう。

誠一は途方に暮れた。

どうしたらいい。

どうしたら。

3人でいられたらいいのに。

しかし、一度気づいてしまったものに嘘はつけない。先延ばしには限度がある。真がしっかりと自覚してしまった以上、もう逃げられないだろう。

誠一はうなだれた。

「……俺たちだけで話していてもダメだな、これは」

真はふうつと大きく息をつき、椅子に座りなおした。眼鏡をかけなおすと、改めて携帯電話の電源を入れた。

「おい、それは……！」

今度は誠一の手も届かない。真は手早くボタンを押し、目当ての人物の番号を呼び出した。

「雪緒？ 今いいか」

第15話 誠一と真 その2（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

## 第16話 雪緒と愛梨 その2

愛梨は紅茶で喉を潤すと、ぐつと雪緒に身を乗り出してきた。

「や、やっぱりその前にユッキーに聞きたいんだけど！」

「うん？」

「ユッキーって、好きな人いる？」

そうくるか。

雪緒は意識的に出来うる限り口角を上げ、目を細めた。

「いるよ」

愛梨は気押されたかのように目を見開いたが、すぐに気を取り直して言葉をつなげた。

「それって、それって宮田センプイ！？」

じらすようなゆっくりとした動作で紅茶を口に含む。これを、愛梨は無言の肯定とみなした。人の恋愛話はおもしろい。愛梨は年頃の娘らしく胸を高鳴らせた。

「告白しないの？」

「別に」

「もったいないよ、絶対両思いなのに！」

「どうしてわかるの」

切羽詰まったような様子の愛梨に、雪緒はカップで口元を隠したまま問いかけた。

「わかるよ！ だって2人はずっと一緒にいたし、センプイはあんなにユッキーに優しいし！ 本人にはわかんないかもしれないけど、センプイはすごく優しい目でユッキーのこと見てるよ。間違いないよ」

「大橋さん、ちょっと抑えよう」

「あ」

店内の注目を集めてしまっていたことに気づき、愛梨はようやく口を閉じた。

「大橋さんには、真さんがそう見えるんだ」

「うん！」

愛梨は勢いよくうなずく。そんな彼女に、雪緒はこの前学校で別れ際に見せた、艶やかすぎる視線を送った。

「じゃあ、誠一さんはどう」

「え？」

雪緒は意識的に作った微笑みを崩さずに言った。

「誠一さんは、私のことどう思ってるかな」

「……え？」

愛梨の心が大きく揺れるのがわかった。

雪緒はそれに満足感と自分への嫌悪感の両方を覚えた。

「せ、誠一センパイ？」

「そう。私、誠一さんが好きなの」

愛梨は耐えられない、といったように顔をひきつらせた。

「う、うそ！　じゃあ宮田センパイは！？　好きじゃないの！？

それなのにあんなにいつも一緒にいるの！？」

「真さんも好き。勘違いしないで」

雪緒はさらりと言った。

「な、にそれ。おかしいよ。どっちが好きなの？　もうやだな、ユツキー。友達として、じゃなくて恋愛の話だつてば。は、はっきり言つてよー」

愛梨は唇を震わせながら、雪緒の言葉をなんとか冗談に持ち込もうとした。彼女の価値観からすれば信じられないのだろう。雪緒にしても理解してほしいとはまったく思っていない。

「私は、誠一さんと真さんの両方が好きなの。ずっといつしよにいたいと思ってる」

雪緒が愛梨の望み通り「はっきり」と言ったことで、愛梨はさらに体を震わせる。

「そんなのひどい、二股じゃん！ ユツキー、それはまずいよ」  
「なぜ？」

「不誠実だよ！」

雪緒はわざとらしく首をかしげてみせた。

「どうして？ 私は3人でいたいだけなのに」

「でもそれって宮田センパイと誠一センパイを裏切ってる」

愛梨はじつと雪緒を見つめた。

雪緒はこれから愛梨の愛の価値観について講釈を受けるものと思っていた。誠実に誰かを愛するということ。互いに想い合うことの素晴らしさ、大切さ。そんなところか。

しかし愛梨は驚くべきことをした。少なくとも雪緒の想定外。慈悲深い聖母のような表情を浮かべたのだ。

「ね、ユツキー。もしかしてユツキーの気持ちって、恋じゃないんじゃないかな。ユツキーはただいっしょにいたいだけでしょ。それは宮田センパイの気持ちを無視してるんじゃない？」

「無視？」

「ごめん。あたし、ようやくわかった」

愛梨は痛ましげに目を伏せた。

「ユツキーは嘘ついてなかったんだね。本当に2人はつきあってなかった。宮田センパイがユツキーに片思いしてたんだ。でも、ユツキーは誠一センパイとの関係も崩したくなかったから、応えられなかったんだね。あたし、本当に無神経なこと言ってた。ごめんなさい」

愛梨はぺこ、と頭を下げる。今までの激情はどうしたのか、というほとしおらしくなっていた。

「誠一センパイは、そんな宮田センパイを見かねてわざと怒ったフリして離れようとしてたんでしょ？ ユツキーはそれがイヤなんだよね。わかるよ。だって、すっごく仲良かったもんね」

「……………」

雪緒は作り笑いを消した。そして愛梨のポニーテールをじつとみつめている。

「でもさ、やっぱりそれって不自然な付き合い方になっちゃうよ。大丈夫、宮田センパイと付き合ったとしても、誠一センパイはいなくなったりしないんだから。大事な幼馴染でしょ？ 案外、それで十分だったりするんだよ。今のままじゃ宮田センパイも、気を遣ってる誠一センパイもかわいそう。ユッキーだって身動きとれなくなっちゃう。よくないよ、そんなの」

愛梨はいきなり腕をのびし、テーブル越しに雪緒の手を握った。  
「ちよつと落ち着いて考えてみてよ。ね？」

愛梨は幼子をなだめるようにうなずいてみせた。  
そして再び凍りつく。

雪緒の瞳の、あまりの冷たさに。

「話を聞かないのね、大橋さんって」

「……え？」

雪緒は優しいともいえる仕草で愛梨の手を引き離れた。

「私は恋愛感情込みで誠一さんと真さんが好きなの。その上で3人でいたいと思っている。大橋さん、もう一度聞くけど、誠一さんは私のことどう思ってると思う？」

愛梨は目を大きく見開いた。

「大橋さんは相手の感情の機微に敏感だから、本当はわかってるんじゃない。それでもわからないフリをするなんて、やっぱり大橋さんて器用」

いつでも天真爛漫、周囲に笑顔と愛をふりまく人気者が、苦しんでいる。愛梨が少女漫画の主人公なら、自分は主人公をいじめるイヤな女のポジションにいるのだろう。

「私はわかってる。でも誠一さんは残念なことにアナタ寄りの考えで、恋愛は1対1でやるもんだと思ってる」

雪緒はふつと息をついてから続けた。

「だから私は問題を先延ばしにしていた。幸い真さんは鈍感だし、誠一さんは繊細すぎて何も行動を起こさない。このままいれば、もうしばらくは3人一緒にいられたのに。それなのにアナタが邪魔をした」

雪緒は自分で話しながら、再び愛梨への怒りがこみ上げてくるのを感じた。

自分に害をなすものを。

自分たちの素晴らしき三角関係を崩そうとするものを。

「ねえ、大橋さん。アナタのアドバイス通りに私が真さんと恋人同士になったら、アナタはどうするつもりなの？ 誠一さんに告白しようと思った？」

愛梨はかあつと頬を染めた。走ったからでも寒いからでもなく、見透かされたことの羞恥心だ。

「ずるいね、大橋さん」

「ちがう！ ずるくない！ あたしは、誠一センパイが好き。あたしはユツキーと違うもん。誠一センパイだけが好き！」

「だから自分のほうが誠実だって言いたいのか？」

「……………」

愛梨は雪緒の視線から逃れるようにうつむいた。

「でも、誠一さんは大橋さんの気持ちには応えない」

「なんでそんなこと言うの！？」

悲痛な声をあげる愛梨。感情が高ぶったせいか、テーブルの上にぱたりと目からしずくが落ちるところが見えた。

こんな風に気持ちをストレートに表現できたら。雪緒はぼんやりとそう思った。見えているのに見えないふりをして、終わりを迎えるのが怖くて気付かないフリをして。望んでその場にとどまって、自分の気持ちも相手の気持ちも無視している自分とは大違いだ。

「絶対、あげない」



雪緒は唇をかんだ。これではおもちゃを取られるのがイヤな子どもだ。だが、心境としては似たようなものだろう。子どもにとっておもちゃは数少ない宝物だ。雪緒にとって2人は、絶対に失えない宝物なのだから。誰にも触られたくない。

「大橋さんには、真さんも誠一さんもあげない」

「……それでも、あたしは誠一センパイが好き」

愛梨は顔をあげて雪緒に向かい合った。目には涙がいつぱいにたまっているが、全身から雪緒に対する敵愾心が燃え出ている。

雪緒はそれに少しばかり安心した。やたらと親しく好意を向けられるより、よっぽどましだった。

「大橋さんの気持ちは大橋さんだけのもの。私は口出しできない」

「だったら誠一センパイだってそうでしょう。口出ししないで！」

「イヤ。だって」

私の、だもん。

そう言いかけたとき、カバンに入っていた雪緒の携帯電話がブーツーツとうなり始めた。

第16話 雪緒と愛梨 その2（後書き）

ご意見・感想をお待ちしています。

第17話 ひさびさの3人組

ピンポン。

間抜けなチャイムの音が、誠一の上にのしかかる。

「俺が出よう」

そう言って部屋を出る真を見送ることもできず、誠一はベッドにつぶして倒れこんだ。

もう、こうなってはとうしようもない。

とんとん、という軽快に階段を上る音が2つ重なって聞こえてくる。

「こんにちは」

「……よう」

正面から向き合うことができず、誠一はうつぶせになったまま返事をした。

「起きてる？」

「起きてる」

耳の傍で聞こえる澄んだ声音に、誠一は動けなくなってしまった。

「せえーいーちさーん」

「ぐえ」

ぼす、と背中にもたがってきた重み。

「おーきーて」

「起きてるって言ってたんだろ……」

「真さん、こんなこと言ってるけど」

「往生際が悪いぞ、誠一」

誠一はしっしつと背中へはりついているモノをどかし、ようやく身を起こした。

そしてベッドの横に立つ彼女をようやく視界に入れた。思った通り、ご機嫌斜めのようなだ。

「お久しぶり、誠一さん」

「ああ」

さっそくチクリとトゲをきかせてきた雪緒を前に、誠一は深く深くうなだれるのだった。

誠一は真以上に雪緒との接触を断った。絶縁宣言すら真を通して伝えただけだ。それには大きな理由があった。

「ったく、やっぱりカサカサになってるじゃねーか。クリーム塗れって言うてんだろ！」

「だって、ごはん食べて洗ってトイレ行って洗ってってやってたら忘れちゃうよ」

ベッドに並んで座った雪緒は、さっそく誠一から怒られていた。

「めんどろくさがって手えぼろぼろにしてりや世話ねーよ。真、机の上に缶あるだろ、それ取れ」

「これか？ ビーズが入ったこんなでかい缶、何に使うんだ」

「バカ野郎、それじゃねーよ！ 察しろ！ 右端のだよ、ハンドクリームって書いてあんだろが」

「ああ、これか」

誠一は真が放った小さな丸い缶を受け取ると、黄色がかったクリームを少しだけとり、雪緒の手にすりつけていった。無骨な手が器用に動き、雪緒の小さな手をつつむ。

「ありがとう、誠一さん」

「次からは自分でやれよ」

「もうそのセリフ耳にタコ」

「お前がやんねえからだろが！」

誠一がかみつくと、雪緒は目元をわずかにゆるめ、ようやく笑っ

て見せた。

「そう、私はやらない。だから誠一さんのそばにいるの」

ぐっと言葉につまる誠一を見て、真が楽しそうに笑った。

それぞれがくすぶった気持ちを抱えていたというのに、3人そろってみればたった一瞬でいつも通りだ。

誠一は弱い。とにかく弱い。何にとは言ってもない。

雪緒にだ。

もしも雪緒がそばにいたら、遠ざけるどころか自分から世話を焼きに近寄って行ってしまう。もしも機嫌が悪いようなら、どうにかしてあやさなくてはならないような気がしてくる。

絶交だと言い放ったところで、「なんでそんなこと言うの、誠一さん」とまっすぐ見つめられたらもうダメだ。その上ペタッとひっつかれたら、誠一に拒否権はない。

そして恐ろしいことに、雪緒は誠一が自分に逆らえないことを知っている。

だからこそ雪緒を遠ざけた。

雪緒も、誠一が納得しないまま絆されるのを良しとせず、誠一の気持ちをくんだのだ。しかしもう限界だった。

「やっぱりこれが一番落ち着く」

真は満足げに言った。

誠一と雪緒も同意見だった。今となってはあの2週間がばからしくてしかたがない。だが、問題は何も解決していなかった。

「ところで真さん、誠一さん。私、なんでいきなり呼ばれたの」

雪緒は2人の顔を順番に見た。

「ああ。俺たちだけで話し合っていたんでは、何も解決しないんだ。雪緒にも来てもらったんだ」

「何を解決するって？」

首をかしげた雪緒の顔をのぞきこむようにして真は言った。

「雪緒。俺は幼馴染としてではなく、女としてお前が好きだ」  
「な」

ど真ん中の剛速球に、雪緒は白い頬を一瞬で赤く染めた。  
横でそんなやり取りをされた誠一はたまったものではない。いきなり何を言い出すんだコイツは！　と今まで何度突っ込んだかわからないセリフを復唱する。だが、真はさらにとんでもないことを言っただけだ。

「おい、誠一。次はお前だ」

「はあ！？」

「こうしないことには話が進まない」

真は至極当然、とあごで雪緒をさした。先ほど告白した相手にとるような態度ではない。

雪緒は目を丸くさせ、いつもの無表情をどこにやったものかおろおろとしている。

真の言いたいことはわからなくはない。ここでハッキリさせようというのだろう。そのためにはまず自分の気持ちを伝えろ、ということらしい。

だからってなんだってこんな……。

ゴクリ、と自分が喉を鳴らす音がやけに大きく聞こえた。雪緒にも伝わってしまったらしく、こちらを見上げてくる。

誠一は口の端がひきつるのを感じた。

「早くしろ」

「うるせー、真！　誰もがお前みたいだとは思っちなよ！」

ああ、ちくしょう！　文句ならはいくらでも言えるのに！　誠一はののしったが、雪緒の不安と期待の入り混じった顔から目をそらすことができなかった。

「あー……。その、だな。雪緒」

「うん」

「……まあ、そういうことだ」

「なんのことだ」

「真、お前は黙ってる！」

「真さん、ちょっと口閉じて」

「なんだお前ら、人をなんだと思ってるんだ」

真があからさまにふてくされるが、もう構ってられない。とにかく目の前の問題をさっさと終わらせねば、と誠一は呼吸を落ち着けた。

「えー、俺は、だな」

「うん」

雪緒の瞳に、自分の情けない姿が映っていることに気付いた誠一は大きく息をついた。

「……はア。もうだめだ」

「なんでダメなの！ あとひと押し！ 誠一さん！」

「ああ……」

うなだれてしまった誠一を、雪緒は肩をゆさぶるようにして励ました。なんでもいきなりこんな展開になってしまったのかはまったくわからないが、今を逃せば誠一は遠ざかるだけで二度と歩み寄ってはくれない気がした。雪緒はなんとしてもここで言質を取っておきたかったのだ。

「……………雪緒」

「はい！」

「……好きだ」

長い沈黙の後の、蚊の鳴くような小さな声。

それでも聞き逃すことなく、雪緒は感極まったように目をつるませて誠一の胸に飛び込んだ。

「あ、おいコラ。俺のときと全然違うぞ、どういうことだ雪緒！」

真がべりりとひきはがすと、雪緒は今度は真にしがみついた。

「やった！ やった！」

雪緒はぐりぐりと真の胸に額をこすりつけながら、何度も言った。何がやったなのか、正直自分でもわかっていなかった。

雪緒は真のように鈍感ではない。真の気持ちも、誠一の気持ちも

とづくに知っていた。だが、やはり言葉で直接伝えられた嬉しさと安心感はたまらなかった。

子どもじみた思いだとはわかっている。それでも、ようやく自分のものになった、という独占欲が雪緒を満たしていた。

「じゃあせっかくだ。雪緒からも言ってもらおうか」

真は腕の中の雪緒に言った。

「え？」

「俺たちばかりでは不公平だからな。言え。雪緒」

雪緒ははっと背筋を伸ばすと、わざとらしく咳払いをして正面から真に向き直った。

「えー、と。真さん」

「なんだ」

真も真正面から雪緒を迎え撃つ。

「真さん、好きです」

「それは親愛だけでなく、恋愛感情をもって、だな？」

「疑り深い」

恨みがまく雪緒が言つと、真は優しく笑った。それでも耳と首筋が色づいているので、雪緒は少し気分をよくした。

「重要な点だ。はつきりさせないと」

「1人の男性として、真さんが好き」

「うん」

真は満足げにまたうなずいた。

さて、と雪緒は次に誠一の前立に立った。

ベッドに座った誠一と立った雪緒の頭の位置は、ほとんど同じくらいにある。

「私は誠一さんが好き。もちろん恋愛感情をもってして、です」

誠一は何かこみあげてくるものをかみしめるように、ゆっくりとうなずいた。



誠一はおだやかに微笑んだ。鬼の面にかわいらしいリボンをつけたような不自然さがあつたが、それにおびえる人間はこの場にいなかった。

「雪緒。お前はとうしたい」

「え？」

「気を使う必要はないんだ。お前がしたいようにしていい。恨みっこなしだろ、こういうのは」

「……」

雪緒からは興奮も喜びも消えていた。ただただ悲しそうだった。

こんな顔を見たくなかったのに。誠一は心が痛んだ。こんな選択を雪緒にはさせたくなかった。真に乘せられるようにして告白してしまつたが、やはり自分は間違つていたのか。

「私には選べない。真さんと一緒にいたい。でも、誠一さんとも一緒にいたい」

誠一は痛ましげに雪緒を見つめた。

誠一が口を開こうとしたとき、それをとめるように真がパン、と手を打ち鳴らした。

「さて、これでわかつたな！」

真は輝くばかりの笑みを浮かべていた。

「何が？」

「何の話だ」

お前、今のやり取りの意味わかつてる？

感傷的な気分を壊された誠一と雪緒だったが、真は一切気にしない。いや、気づいていない。

仁王立ちした真は、首をかしげている2人に対して首をかしげてみせた。

「なんだと？ わかつてないのか、お前ら」

「お前のぶつ壊れた思考回路なんて読めねーよ」

「右に同じ」

ねえ、と雪緒と誠一が顔を見合わせて小馬鹿にしたような態度を示すと、真も負けじと鼻を鳴らした。

「誠一、つまりお前が間抜けだったということだ」

「はあ？」

まさか真に言われるとは思わなかった。そんな様子で聞き返す誠一に、真は顔色一つ変えずにもう一度言った。

「間抜けだ、といったんだ。お前が離れようとする必要なんかなかったんだ。簡単なことじゃないか、三人でいればいいだけの話だろう」

真は2人の顔を交互に見た。

「いいか、よく聞け。雪緒もだぞ。俺は雪緒が好きだ。雪緒のそばにいたい。だが実際どうだ、誠一がいないとどうにも雪緒とうまうかない。それはなぜか？俺が誠一を恋しがる雪緒をあやせないからだ」

「あやすって……」

「真実だぞ、雪緒。誠一はお前を甘やかすのがとんでもなくうまいからな。そして、誠一のそばには俺がいなければならない。しかし2人だけだとダメだな、誠一は頭が固すぎてすぐに眉間にシワが寄る。俺はなんでか知らんが怒鳴られてばかりだ。雪緒という円滑剤が必要不可欠となる。そして誠一と雪緒、お前らが2人になったとしたら、雪緒は甘やかされるばかりで煮詰まり、何らかの理由で俺が恋しくなるぞ。なにせ雪緒は俺のことも好きなんだからな」

雪緒は真の意図を正確に読み取った。

自分がダダをこねるのではない。真流論理で誠一をその気にさせるのだ。

真はいつもこうして無理やりな論理展開を行い、慎重でごくごく常識的な誠一に免罪符を与えてきた。だから誠一は行動できる。一方で真は何があっても誠一が支えてくれる、という信頼をもっているから突飛な行動ができているのだ。雪緒はくやしいながらも、そういった2人の関係もよく理解していた。

真の推測はほぼ正解であるが、雪緒と誠一が2人だけになった場合は想定する必要はないだろうと雪緒は思った。今回身を引こうとしたように、誠一が真を気遣ってそんな状況を作らないからだ。もし万が一、そばに真がいらないなんてなったら、雪緒は誠一をひきつけて精一杯のダダをこねるだろう。対真の説得ならば、方法が単純明快なほど効果が上がる。

真の思考回路は少々常識外れではあるが、これしかない。

口をはさもうとする誠一を抑えつけながら、目だけで真に先を促した。

「つまりだ。俺たちはそれぞれの一边を担って正三角形を作っていないと、どうにもうまく動かないんだ。なに、今までの幼馴染としての友愛が恋愛に変わるだけだ。問題ない」

ネジぶつとんでんじゃねえか、と思うことが多い幼馴染だったが、まさかここまでとは。誠一は返す言葉もない。どうしたものか、と戸惑っていると、ここでまさかの援護射撃が加わった。

「そう……だね。真さんの言うとおり」

しかも、真の方に。

「おい！ 雪緒まで何言い出してやがる」

「だってそうでしょ。誠一さんだって真さんと一緒にいたいでしょう。でも誠一さんも真さんも私を好きでいてくれるんでしょう。万々歳」

「いや、それじゃマズいっつってんだろぅが」  
「なんでだ」

真は心底ワケがわからない、という顔をしている。それが誠一には腹立たしい。

「だから、女一人の男二人じゃ計算あわねーだろうが！」

「誠一に対して嫉妬しないワケではない。だが誠一だから雪緒にふ

さわしいと思えたんだ。そして俺は雪緒にも嫉妬する。なんだか時々お前たちばかり通じあつて、俺が外されたような気持ちになる。しかしそれでも雪緒なら許そうと思えるんだ」

誠一は言い返せなかった。

お似合いだと噂されている2人の仲睦まじい姿を見ていられなくなったことは数え切れない。雪緒に気を取られて自分の話を聞かない真に対し、額に青筋を浮かべたことだって多々ある。

雪緒も同じだった。どうしても入り込めない男同士の友情には何度も歯がみした。

それでもいいかと思えたのは、誠一が、真が、雪緒が、他の誰よりも信頼に足る相手だったからだ。

「そして今、雪緒は俺たちを選んだんだ。そうだろう?」

いきなり話をふられた雪緒は戸惑いながらもうなずいた。それを見てほらな、と真は胸をそらした。

「俺だって同じだ。雪緒もほしいが、お前もほしいんだ。欠けたら意味がない。お前は違うのか」

「……」

誠一はまたもや言い返せない。

本音なんて言えなかった。それは非常に甘い誘惑であつたが、あまりに倫理に反しているように思えたし、常識外れだった。

「誠一さん、なんでダメなの」

雪緒の問いかけに、誠一は自分の頭をガシガシとかきまわした。

「お前なア、それじゃ後々大変だろうが! 雪緒、お前はそうやって俺らと付き合つていつて、周りからどう思われる? 二股扱いされていじめられるかもしれないんだぞ! それに結婚とかどうするんだ。子どもは……って、あ」

思わず自分の口から出た言葉に誠一はかあつと顔を赤らめた。対象的に雪緒の瞳は喜色に染まる。

「うれしい。私と結婚まで考えてくれてるんだ」

「ああああああ! 今のは言葉のあやだ! つまり、一般常識的

におかしいだろ！ 3人じゃ！」

「そこが馬鹿だというんだ、誠一」

「そうそう。そんなものにとらわれてたら人生楽しくないよ、誠一さん」

「お前ら……」

誠一を真ん中にしてベッドに座った真は、がっしりとその肩に腕をまわした。雪緒はべったりと誠一の横っ腹にしがみつく。

いつもこうだ！

誠一は心の中で叫んだ。見た目に反して破天荒なことばかりやらかす幼馴染のストッパー役を自認しているというのに、なんだかんだで最終的には引つ張り込まれてしまう。

今時の学校つてもんは何を教えているのか。学力ばかりあつてもダメだ、という見本がなんだつて2人も自分の前にいるのか。

俺にはこいつらに抗えない。

「諦めましょ、誠一さん」

「ああ、認めた方が気が楽になるぞ」

「うるせエよ！ 開き直るな！」

正直なところ、この先面倒なことで山積みになるだろう。世間というのはそういうものだ。だが、どうしたことか。そんな面倒事を回避するよりも、この3人でいることにより価値を見出してしまっている自分がある。

誠一は大きいため息をついた。

「あー、もういい。しばらく考えんのはやめだ……」

両脇から嬉しそうに笑顔を向けられるが、誠一は反対にどんどんと顔を陰しくしていった。

「お前らには付き合い切れねーよ」

「まあまあ、そう言わず」

「とことん付き合ってもらおうじゃないか」

真と雪緒は、もう離すものか、と腕に力をこめたのだった。

第17話 ひさびさの3人組 (後書き)

次回で最終回です。

ご意見・感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9958y/>

---

せいさんかけい！

2012年1月10日20時54分発行